

# 平安京右京六条三坊六町跡

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 平安京右京六条三坊六町跡

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、会社施設建設に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和5年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

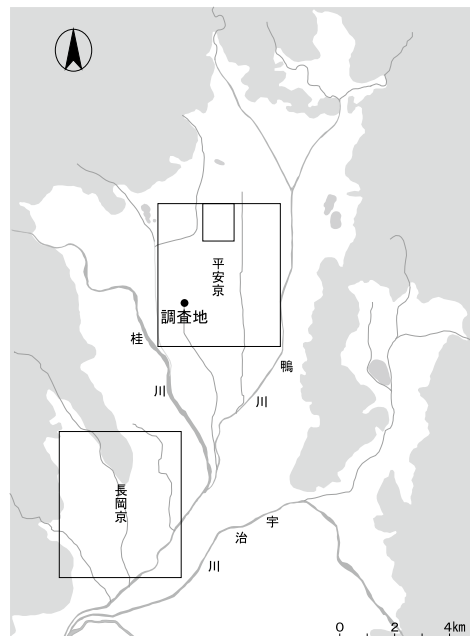
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（京都市番号 22 H 128）
- 2 調査所在地 京都市右京区西院西溝崎町19番地1他
- 3 委 託 者 ローム株式会社 総務・安全・サステナビリティ推進担当  
総務部長 山根慎太郎
- 4 調査期間 2022年12月8日～2023年5月15日
- 5 調査面積 1,859㎡
- 6 調査担当者 松吉祐希・岡田麻衣子・渡邊都季哉・樋口武志
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器・土製品は番号のみとし、瓦は「瓦」、木製品は「木」を番号の前に付けた。
- 13 本書作成 松吉祐希  
付章：株式会社 パレオ・ラボ
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・整理にあたっては、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝いたします。

國下多美樹（龍谷大学）、澤田裕子（三重大学）、清水みき（古代学協会）、谷崎仁美（龍谷大学）、中町美香子（花園大学）、西山良平（京都大学）、平尾政幸、堀 大介（佛教大学）、山中 章（三重大学）、吉野秋二（京都産業大学）  
※ 敬称略、所属は調査時

（調査地点図）



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の契機	1
(2) 調査の方法と経過	1
2. 調査地の位置と環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 弥生時代の遺構	5
(3) 平安時代の遺構	5
(4) 中世の遺構	9
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器・土製品	10
(3) 瓦	13
(4) 木製品	13
5. ま と め	15
(1) 調査地の歴史的変遷	15
(2) 平安京右京六条三坊六町の宅地	15
付章 自然科学分析	19

# 図 版 目 次

図版1	遺構	調査区配置図 (1 : 500)
図版2	遺構	調査区平面図1 (1 : 200)
図版3	遺構	調査区平面図2 (1 : 200)
図版4	遺構	調査区南壁断面図 (1 : 80)
図版5	遺構	調査区東壁断面図 (1 : 80)
図版6	遺構	建物1実測図 (1 : 80)
図版7	遺構	建物2実測図 (1 : 80)
図版8	遺構	建物3実測図 (1 : 80)

- 図版9 遺構 建物4実測図(1:80)
- 図版10 遺構 建物6実測図(1:80)
- 図版11 遺構 建物7実測図(1:80)
- 図版12 遺構 柱列1・3実測図(1:80)
- 図版13 遺構 1 調査地遠景〔1区〕(北から)  
2 調査地遠景〔2区〕(南から)
- 図版14 遺構 1 1区全景(東から)  
2 2区全景(北東から)
- 図版15 遺構 1 土坑331(北東から)  
2 土坑331遺物出土状況(北から)  
3 建物1・2(東から)
- 図版16 遺構 1 建物2北端(北東から)  
2 建物3(東から)  
3 建物4(南から)
- 図版17 遺構 1 建物1柱穴224半裁断面(北から)  
2 建物2柱穴163半裁断面(北から)  
3 建物4柱穴125半裁断面(東から)  
4 建物4柱穴147柱根検出状況(北東から)  
5 調査区南東部(北東から)
- 図版18 遺構 1 建物6・7(北から)  
2 柱列1(南から)  
3 柱列2(北東から)
- 図版19 遺構 1 溝247遺物出土状況(西から)  
2 溝247完掘状況(西から)  
3 溝356・落ち込み357(東から)  
4 溝356遺物出土状況(北西から)  
5 溝356断面(西から)  
6 落ち込み3571断面(西から)
- 図版20 遺物 土坑331、建物3、溝247・356出土土器

# 挿 図 目 次

図1	調査地と周辺調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（北東から）	2
図3	1区重機掘削状況（西から）	2
図4	1区作業状況（北東から）	2
図5	1区ドローンによる撮影状況（南東から）	2
図6	2区作業状況（南東から）	2
図7	埋め戻し状況（南から）	2
図8	土坑331実測図（1：20）	5
図9	建物5実測図（1：80）	6
図10	柱列2実測図（1：80）	7
図11	溝247・356、落ち込み357断面図（1：40）	8
図12	溝114・118断面図（1：40）	9
図13	土坑331出土弥生土器実測図（1：4）	11
図14	建物3、溝247・356出土土器・土製品実測図（1：4）	12
図15	丸瓦拓影及び実測図（1：4）	13
図16	木製品実測図（1：6）	13
図17	建物4出土柱根	14
図18	平安時代の平安京右京六条三坊六町遺構配置図（1：1,000）	16

# 表 目 次

表1	周辺調査一覧表	3
表2	遺構概要表	5
表3	遺物概要表	10
表4	出土木材の樹種一覧表	14
表5	平安京右京六条三坊六町の建物一覧表	16



# 平安京右京六条三坊六町跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査の契機 (図1)

本調査は、ローム株式会社ものづくりイノベーションセンター新築計画に伴う発掘調査である。調査地は京都市右京西院西溝崎町19番地1他に位置し、平安京右京六条三坊六町跡にあたる。

調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から、平安時代の遺構の検出と、それに伴う遺物の確認を目的とした。

### (2) 調査の方法と経過 (図版1)

調査区は、排土置き場の関係から1区と2区の2箇所に分けて行った。また、2区の北東部に拡張区を設け、調査を行った。調査面積は、1区950㎡、2区845㎡、拡張区64㎡で、総面積は1,859

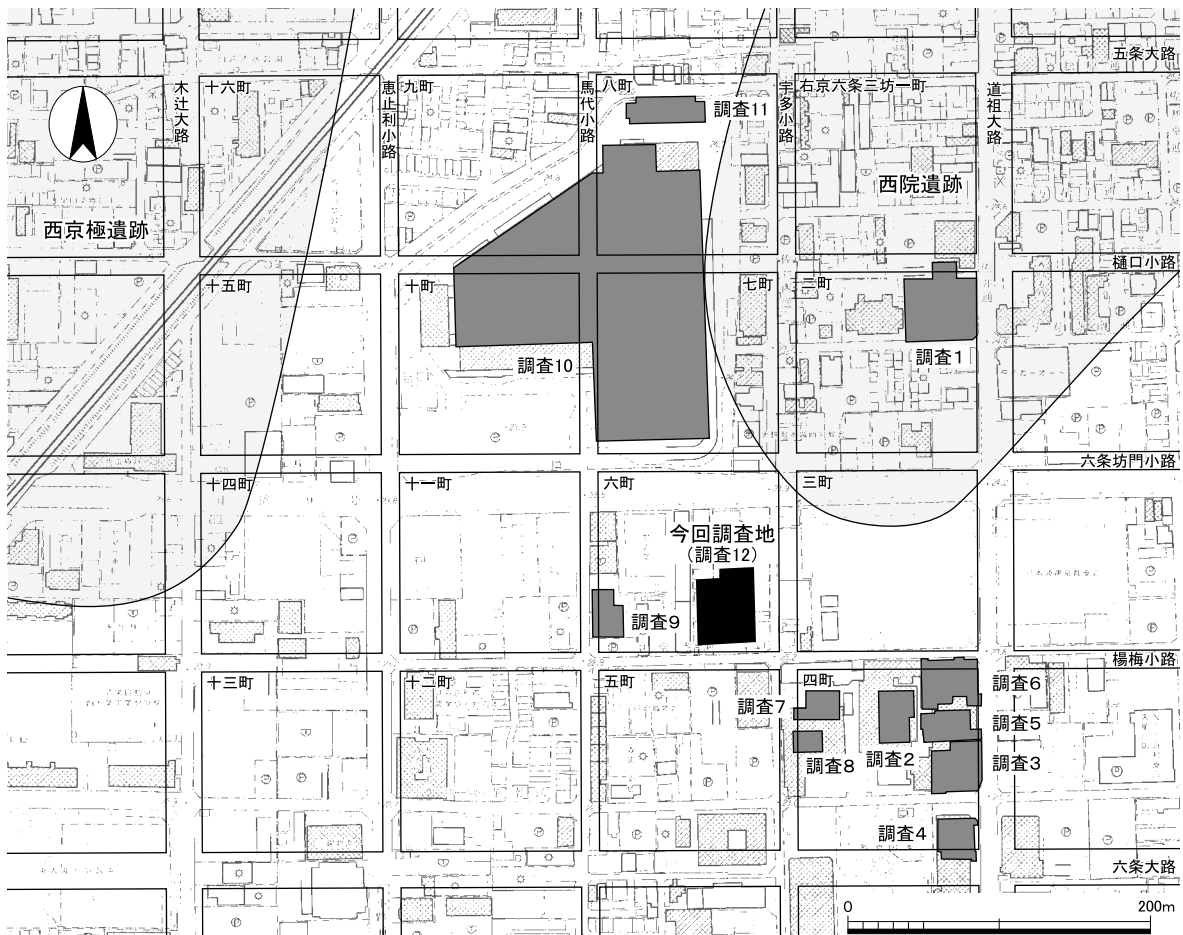


図1 調査地と周辺調査位置図 (1 : 5,000)

m<sup>2</sup>である。

調査は南側の1区から開始し、2区・拡張区の順に行った。現代盛土は重機を用いて掘削し、遺構の検出及び掘削は人力で行った。調査では、掘立柱建物や柱列・溝・土坑などを検出した。検出した遺構は写真測量による平面図や土層断面図を作成し、写真撮影などの記録作業を行った。調査後は重機により埋め戻しを行った。調査期間は令和4年12月8日から令和5年5月15日である。

調査中は適宜、文化財保護課の指導及び、文化財保護課が選任した検証委員である近畿大学の網伸也教授の視察を受けた。



図2 調査前全景（北東から）



図3 1区重機掘削状況（西から）



図4 1区作業状況（北東から）



図5 1区ドローンによる撮影状況（南東から）



図6 2区作業状況（南東から）



図7 埋め戻し状況（南から）



## 2. 調査地の位置と環境（図1、表1）

調査地は、京都盆地の北西部に位置し、紙屋川流域の完新世に形成された扇状地に位置する<sup>1)</sup>。

周辺の遺跡として、調査地北東側で弥生時代から古墳時代の集落跡である西院遺跡、北西側で弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡が広がる。調査地北側の調査10では縄文時代の流路や土坑、調査3では古墳時代の湿地状落ち込みや自然流路、調査11では古墳時代後期の土坑を検出している。

平安時代では、調査地は平安京右京六条三坊六町の南東部にあたり、北を六条坊門小路、東を宇多小路、南を楊梅小路、西を馬代小路に画される。

六町では、南西部で調査が行われており、平安時代前期の掘立柱建物2棟、井戸と井戸に伴う覆屋を検出した（調査9）。

二町では、平安時代前期の掘立柱建物や井戸、土坑、樋口小路と両側溝を検出した（調査1）。四町では、平安時代前期の掘立柱建物、井戸、柵、溝、土坑を検出した（調査2～8）。調査3では、1町を南北に2分する小径（両側溝）を確認している。この小径の側溝は9世紀初頭には埋まるが、その後も掘立柱建物や井戸が検出されており、9世紀後半まで土地利用がなされていたようである。七町では、1町の東西を2分する小径（両側溝と道路）や掘立柱建物群を検出しており、1

表1 周辺調査一覧表

番号	条坊	調査年度	調査機関	平安時代の遺構	その他の時代の遺構	文献
1	右京六条三坊二町	2003年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期：建物、井戸、土坑、樋口小路南側溝。	中世：南北溝。 近世～近代：耕作溝、土坑。	1
2	右京六条三坊四町	1981年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期～中期：建物、柵、溝。		2
3	右京六条三坊四町	1986年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代：建物、柵、溝、井戸、土坑、道祖大路内溝。	古墳時代：流路、落ち込み。	3
4	右京六条三坊四町	1989年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代：建物、柵、土坑（土器埋納遺構）。	鎌倉時代以降：耕作溝。	4
5	右京六条三坊四町	1993年度	古代文化調査会	平安時代：建物、落ち込み、道祖大路内溝。	中世以降：耕作溝。	5
6	右京六条三坊四町	1995年度	古代文化調査会	平安時代：建物、塀、楊梅小路路面高まり。	中世以降：耕作溝。	5
7	右京六条三坊四町	2019年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期：建物、塀、溝、土坑、落ち込み。	中世以降：耕作溝。	6
8	右京六条三坊四町	2022年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期：宇多小路内溝、柱穴列、土坑。	鎌倉時代以降：耕作溝。	7
9	右京六条三坊六町	2004年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期：建物、井戸、馬代小路内溝。平安時代後期：建物、流路（馬代小路）。	中世以降：耕作溝。	8
10	右京六条三坊七～十町	2000・2001年度	古代学協会	平安時代：建物、柵、門、池、流路、木棺墓、樋口小路、馬代小路。	縄文時代：流路、土坑。 古墳時代：総柱建物、流路。 中世以降：建物、耕作溝。	9
11	右京六条三坊八町	1990年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期～中期：建物、柵。	古墳時代後期：土坑。 中世以降：耕作溝。	10
12	右京六条三坊六町	2023年度	京都市埋蔵文化財研究所	平安時代前期：建物、柱列、溝、土坑。	弥生時代：土坑。 中世以降：溝、耕作溝。	本報告

1/2町規模の宅地であったとみられる(調査10)。八町では、平安時代前期に1町規模の邸宅が存在していた。南部は縄文時代から古墳時代の流路跡を利用し、礫を敷くなど修景したとみられる池状遺構、北部は掘立柱建物群が並ぶ(調査10・11)。十町では、1町の東西、南北の中心位置に溝を検出しており、平安時代前期には1/4町規模の宅地であったと考えられる(調査10)。

このように、調査地周辺では平安時代前期の遺構を多数検出しており、1/4町規模(右京六条三坊十町)、1/2町規模(右京六条三坊四町・七町)、1町規模(右京六条三坊八町)の邸宅も営まれていたが、平安時代中期から後期にかけての顕著な遺構・遺物は確認されていない。

中世になると、調査4で鎌倉時代の耕作溝、調査2で鎌倉時代の遺物を、調査5・6で中世の耕作溝を確認している。調査地周辺は、鎌倉時代には耕作地化するようで、その後は近代にいたるまで耕作地としての利用が続く。

#### 註

- 1) 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化」『京都歴史災害研究 1』立命館大学歴史都市防災研究センター京都歴史災害研究会 2004年

#### 文献(表1 周辺調査一覧表の文献番号に対応)

- 1 百瀬正恒『平安京右京六条三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 2 鈴木廣司「31 右京六条三坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 3 平尾政幸ほか「12 平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 4 菅田 薫「25 平安京右京六条三坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 家崎孝治ほか『平安京右京六条三坊-ローム株式会社社屋新築に伴う調査-』古代文化調査会 1998年
- 6 西田倫子『平安京右京六条三坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2020年
- 7 小檜山一良『平安京右京六条三坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2022-7 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2023年
- 8 南 孝雄『平安京右京六条三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 9 堀内明博『平安京右京六条三坊 平安京跡研究調査報告第20輯』財団法人古代学協会・古代学研究所 2004年
- 10 前田義明「21 平安京右京六条三坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図版4・5)

調査地の現地表面の標高は23.0～23.2mであった。基本層序は、上から現代盛土(厚さ0.6～0.8m)、近世とみられる耕作土(厚さ約0.1m、標高22.3～22.4m)、中世とみられる耕作土(厚さ約0.1m、標高22.2～22.3m)、基盤層(標高22.1～22.2m以下)である。

基盤層上面を遺構面として調査を行い、弥生時代から中世の遺構を検出した。

#### (2) 弥生時代の遺構 (図版2・3・14)

土坑331(図8、図版15) 調査区北東部で検出した土坑。北部は削平を受けており、長軸1.5m、短軸1.1mの不定形を呈する。深さは0.2mである。土坑の西部で弥生土器2点が出土した。

#### (3) 平安時代の遺構 (図版2・3・14)

掘立柱建物7棟、柱列3条、溝2条、落ち込み1箇所を検出した。

建物及び柱列の柱穴の柱痕跡は、平面の検出で認識できたものは限定的であったが、断面観察により一定数を確認した。図の点線で示した柱推定位置は、この観察結果によるものである。

建物1(図版6・15・17) 調査区中央で検出した東西棟の掘立柱建物。規模は梁行2間、桁行5間で、柱間は梁行2.4m(8尺)、桁行2.7m(9尺)である。方位は正方位である。柱穴

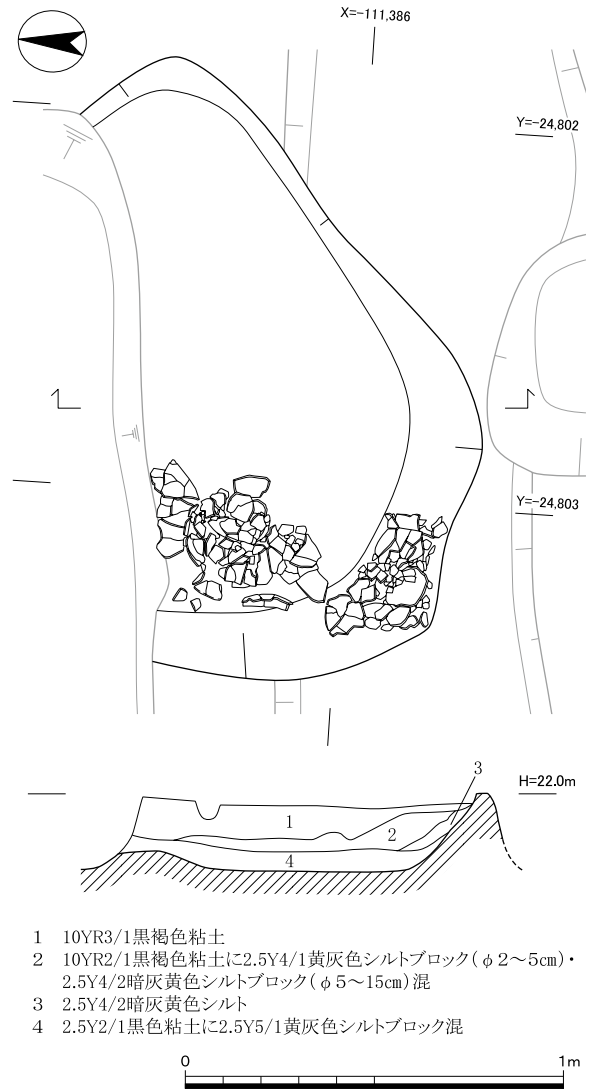


図8 土坑331実測図(1:20)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
弥生時代	土坑331	
平安時代	建物1～7、柱列1～3、溝247・356、落ち込み357	
中世	溝114・118、耕作溝	

の掘形は一辺0.7～0.9mの隅丸方形を呈し、深さ0.25～0.4mである。柱痕跡は径約0.2mである。

**建物2** (図版7・15・16) 調査区中央で検出した東西棟の掘立柱建物。規模は梁行2間、桁行5間で、柱間は梁行・桁行ともに2.7m(9尺)である。方位は正方位である。柱穴の掘形は一辺0.6～0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.25～0.4mである。建物2は、建物1と重複する場所にあるが、柱穴自体は重複していないため、新旧は不明である。柱穴163のみ柱根を検出した。直径20cmである。

**建物3** (図版8・16) 調査区中央南部で検出した東西棟の掘立柱建物。規模は梁行2間、桁行5間で、柱間は梁行2.4m(8尺)、桁行2.7m(9尺)である。北に対して西に約1度振れる。柱穴の掘形は一辺0.7～0.9mの隅丸方形を呈し、深さ0.4～0.6mである。柱痕跡は径約0.2mである。

**建物4** (図版9・16・17) 調査区南西部で検出した南北棟の掘立柱建物。建物の北西部は攪乱により失われているが、規模は梁行2間、桁行5間の身舎に、西側に庇が付く建物とみられる。身舎の柱間は梁行2.4m(8尺)、桁行2.7m(9尺)、庇の出は2.7m(9尺)である。北に対して西に約1度振れる。柱穴の掘形は一辺0.6～0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.4～0.65mである。建物4

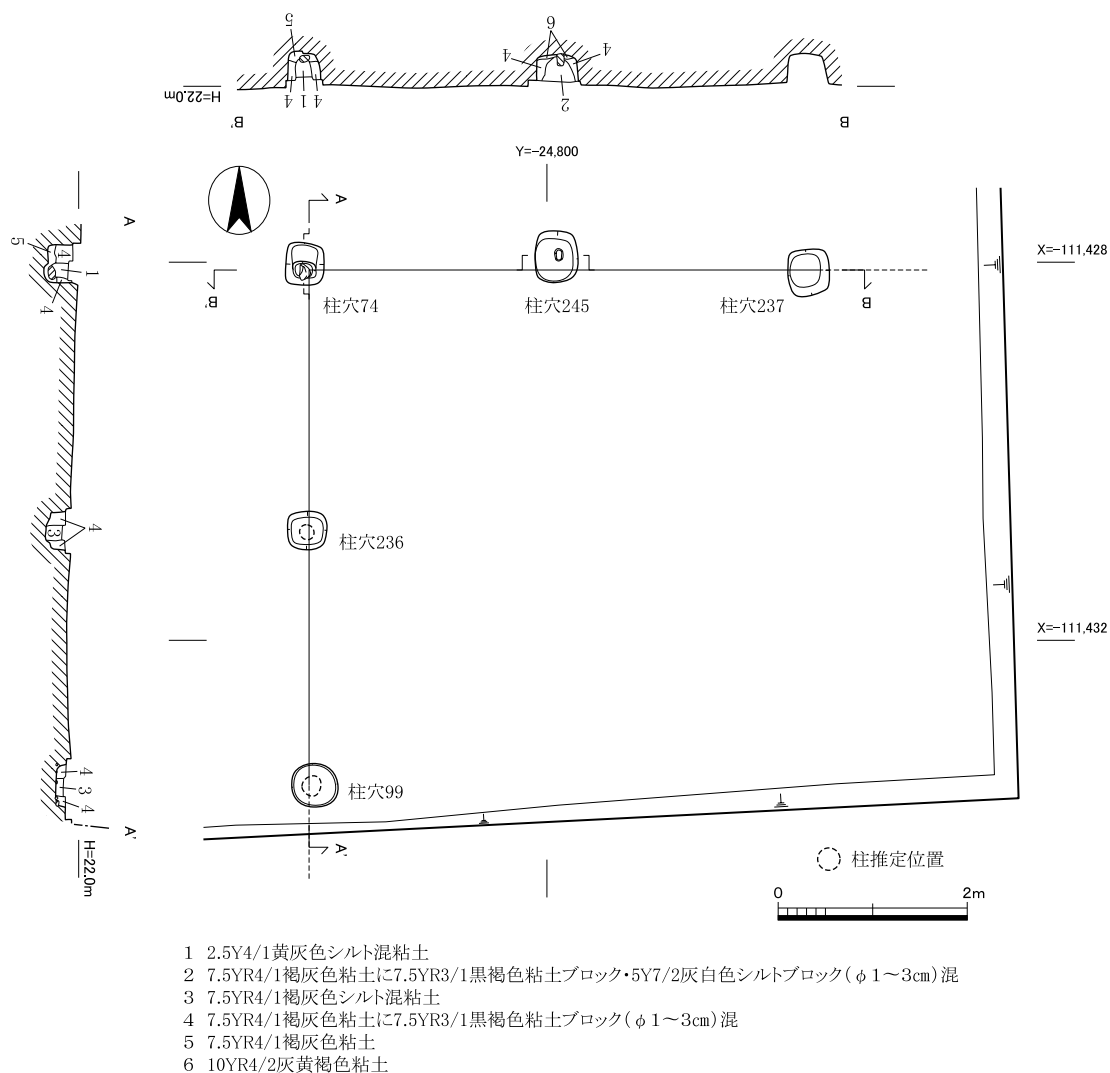


図9 建物5実測図(1:80)

と建物3の柱穴は一部で重複しているが、平面と断面観察から建物3が古く、建物4が新しいことがわかる。柱穴125・127・147・243で柱根を検出した。直径20cmである。柱穴147の柱根北半部の下には、板材や礫が柱根と掘形底面との隙間を埋めるように置かれていた(図版17-4)。柱の傾きを調整したとみられる。

**建物5**(図9、図版17) 調査区南東隅で検出した掘立柱建物。規模は梁行2間分、桁行2間分で、さらに南側と東側に続くとみられる。柱間は東西、南北ともに2.7m(9尺)である。方位は正方位である。柱穴の掘形は一辺0.5mの隅丸方形を呈し、深さ0.2~0.4mである。柱痕跡は径約0.2mである。

**建物6**(図版10・18) 調査区北東部で検出した東西棟の掘立柱建物。規模は梁行2間、桁行4間で、柱間は梁行2.25m(7.5尺)、桁行2.4m(8尺)である。北に対して東に約2度振れる。柱穴の掘形は、一辺0.6~0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.25~0.35mであるが、建物西辺は南北0.6~0.8m、東西幅が約1.0~1.2mと東西に長い隅丸長方形を呈する。柱痕跡は径約0.15mである。

**建物7**(図版11・18) 調査区北東部で検出した東西棟の掘立柱建物。規模は梁行2間、桁行4間の身舎に、北側と南側に庇が付く建物である。身舎の柱間は梁行2.4m(8尺)、桁行2.1m(7尺)、庇の出は3m(10尺)である。北に対して東に約1度振れる。柱穴の掘形は一辺0.5~0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.2~0.5mである。柱痕跡は径約0.2mである。建物7と建物6の柱穴は一部で重複しているが、平面と断面観察から建物6が古く、建物7が新しいことがわかる。

**柱列1**(図版12・18) 調査区中央南部で検出した南北柱列。柱間2.7m(9尺)で、5間分(柱穴200・202・204・206・101・103)を検出した。北に対して西に約1度振れる。柱穴の掘形は一辺0.5~0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.3~0.7mである。柱穴200を除く柱穴5基で柱根を検出した。直径10~15cmである。建物1もしくは建物2の西端と柱筋が通ることから、建物1・2と関連があるとみられる。また、柱列1と想定した柱穴と柱穴の間にも柱穴(柱穴201・203・205)を確認している。

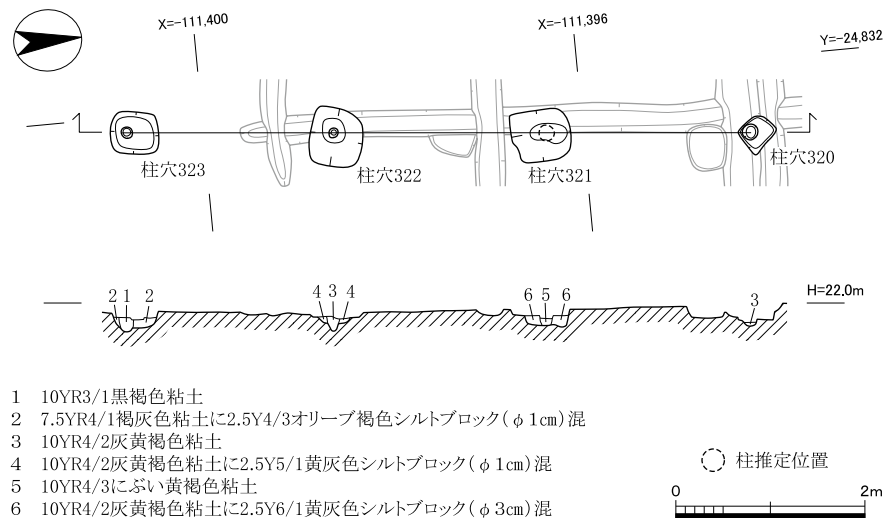


図10 柱列2実測図(1:80)

柱列2 (図10、図版18) 調査区北西部で検出した南北柱列。柱間は2.1m (7尺)で、3間分を  
検出した。北に対して東に約5度振れる。柱穴の掘形は一辺0.4~0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.2  
mである。柱痕跡は径約0.15mである。南側では柱穴を確認できておらず、西側に展開する建物の  
東端の可能性はある。

柱列3 (図版12) 調査区中央南部で検出した柱列。東西に延びる柱列 (柱穴208・234・86)と、  
南北に延びる柱列 (柱穴208・102・104)をそれぞれ2間分確認した。いずれも柱間2.7m (9尺)  
である。北に対して西に約1度振れる。柱穴の掘形は一辺0.4~0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.3~  
0.5mである。柱穴234で柱根を検出した。直径約10cmである。東西に延びる柱列 (柱穴208・234・  
86)は柱列1と直交し、南北に延びる柱列 (柱穴208・102・104)は柱列1と平行する。これら2  
条の柱列と柱列1との柱間も2.7m (9尺)である。この柱列3は、建物の北西隅となるか、もし  
くは柱列1と一連の遺構となる可能性もある。

溝247 (図11、図版19) 建物6・7の北側で検出した東西方向の溝。南北幅は0.9mで、東西  
6.4m分を検出した。深さは約0.5m。埋土にブロック土が確認できることから、人為的に埋められ  
たとみられる。平安時代前期 (8世紀末から9世紀初頭)の土器や炭化物片などの遺物が、埋土3  
層 (図11)の上面から多量に出土した。炭化物はフルイ洗浄を行ったが、すべて木材であった。

溝356 (図11、図版19) 拡張区で検出した東西方向の溝。南北幅は1.5~1.7mで、東西6m分  
検出した。深さは0.6mである。平安時代前期 (8世紀末から9世紀初頭)の完形の土器6点 (図  
14-17~22)が、18・20~22は正位置で、17は外面を下にした状態、19は伏せた状態の逆位置  
で出土した。埋土にブロック土を確認できなかったことから、人為的でなく自然に埋没したと考え  
られる。

落ち込み357 (図11、図版19) 溝356の北側で検出した落ち込み。北端は調査区外である。深  
さは0.2mほどであるが、調査区北西隅は0.3mと深くなっており、底面は凹凸がある。埋土にブ  
ロック土が確認できることから、人為的に埋められたとみられる。出土遺物は、平安時代前期 (8  
世紀末から9世紀初頭)の土器が主体を占めるが、10世紀前半の遺物も含まれていた。

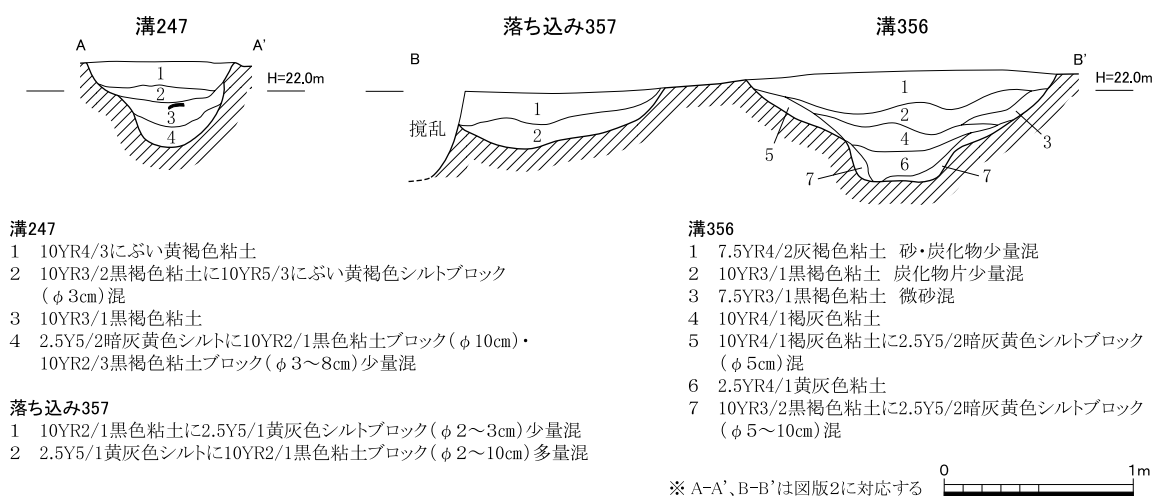


図11 溝247・356、落ち込み357断面図 (1:40)

(4) 中世の遺構 (図版2・3・13・14)

溝2条、耕作溝を検出した。これらの遺構は、壁断面の観察から、基盤層上層の中世とみられる耕作土層上面で成立するとみられる。

**溝114** (図12) 調査区中央で検出した南北方向の溝。東西幅は北部0.5m～南部0.7mで、南北約50m分検出した。北で東にやや振れる。深さは北部0.1m (標高21.80m)～南部0.15m (標高21.70m)で、南へ向かって緩やかに傾斜する。出土遺物は少ないが、鎌倉時代の溝118と遺構の振れが類似しているため、中世の遺構とみられる。

**溝118** (図12) 溝114の約2m西側で検出した南北方向の溝。東西幅は北部1.0m～南部1.4mで、南北約42m分検出した。北で東にやや振れる。深さは北部0.15m (標高21.80m)～南部0.2m (標高21.73m)で、溝114と同様に、南へ向かって緩やかに傾斜する。瓦器碗が出土しており、鎌倉時代の遺構とみられる。

**耕作溝群** 調査区の全域で素掘り小溝を検出した。南北溝は北でやや東に振れるものが多く、東西溝もそれに直交している。平安時代から中世の遺物を包含する。

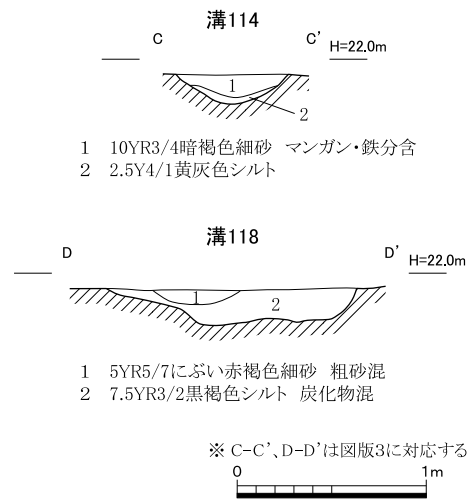


図12 溝114・118断面図 (1:40)

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査では、遺物整理用コンテナ17箱分の遺物が出土した。内訳は、土器・瓦類15箱、木製品2箱である。

弥生時代の遺物は、弥生土器が土坑331から出土した。

平安時代の遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、円面硯、瓦などが主に溝247・356などから出土した。建物の柱穴からの出土遺物は少ないが、9世紀前半に属する。また、建物4や柱列1では、柱根が良好な状態で残存していた。瓦の出土量は非常に少なく、小片が数点出土した程度である。

中世以降の遺物は、土師器、施釉陶器、瓦器、磁器、染付が溝118や耕作溝から出土した。

以下、主要な遺構から出土した遺物を中心に概要を記す。遺物の時期は平尾政幸氏の土器編年案に拠る<sup>1)</sup>。

### (2) 土器・土製品

#### 弥生時代の土器 (図13、図版20)

土坑331出土土器(1・2) 1・2は弥生土器壺。1は口径18.8cm、底径6.4cm。平底で倒卵形の体部から口縁部が屈曲して開き、端部を拡張する。内面上部はハケ、外面は縦ハケ後に右下がりのタタキ。全体的に摩滅しており、調整は不明瞭である。内面は灰色、外面はにぶい黄橙色を呈す。2は口径21.4cm、底径6.7cm。平底で倒卵形の体部から口縁部が外反して開き、端部は垂下する。内面はハケ後にナデ、口縁部内外面は横ナデ、外面は縦ハケ後に横位タタキ。内外面ともに灰白色を呈す。いずれも弥生時代中期後葉。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、円面硯、瓦、柱根		土師器11点、須恵器6点、緑釉陶器2点、円面硯1点、瓦1点、柱根2点		
中世以降	土師器、施釉陶器、瓦器、磁器、染付				
合計		21箱	25点(5箱)	1箱	15箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。



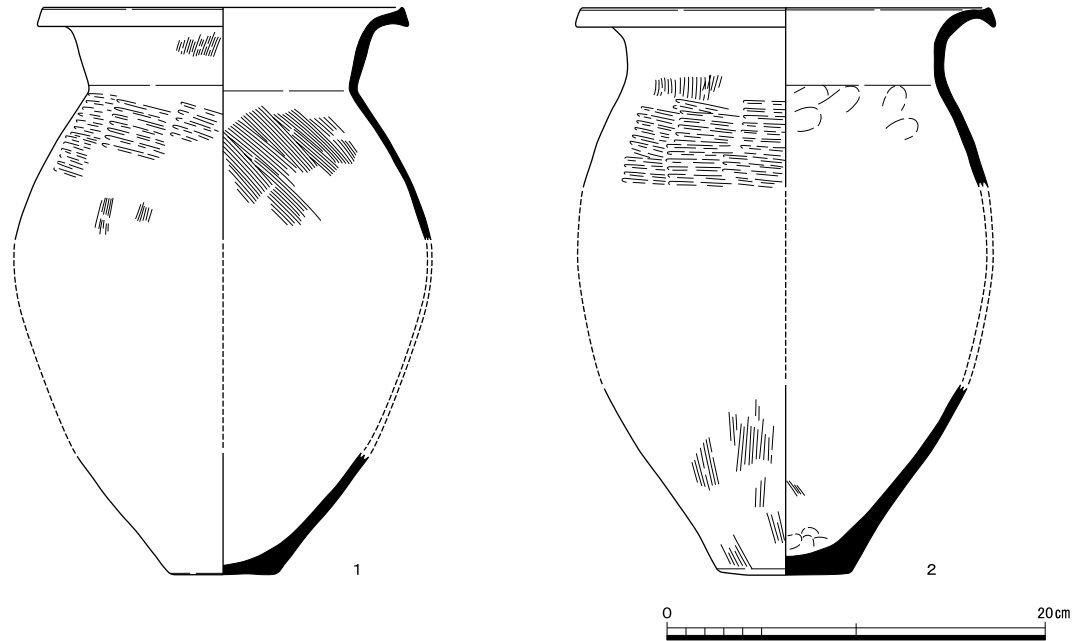


図13 土坑331出土弥生土器実測図（1：4）

#### 平安時代の土器・土製品（図14、図版20）

建物3出土土器（3） 3は緑釉陶器甌の口縁部。内外面ともにナデ。内面は浅黄橙色、外面は釉が施されており、オリーブ灰色を呈す。建物3の柱穴181から出土した。

溝247出土土器・土製品（4～16） 4～10は土師器。4は椀A。口径11.3cm、器高2.5cm。口縁部内外面に煤が付着する。外面はケズリ。5は杯A。口径17.2cm、器高3.7cm。外面はケズリ。6は皿C。口縁部横ナデ、外面オサエ。7～9は皿A。7は口径18.6cm、器高2.7cm。8は口径18.6cm、器高2.6cm。7・8ともに外面は摩滅のため調整不明である。9は口径18.8cm、器高2.7cm。外面はケズリ。7～9は別個体であるが、寸法はほぼ等しい。10は土師器甕。口径22.5cm。内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、外面ハケ目。

11～14は須恵器。11～13は杯蓋。11は口径12.2cm、器高3.3cm。宝珠形のつまみをもつ。12は口径16.1cm、器高2.5cm。完形。扁平のつまみをもつ。外面頂部に1字もしくは2字の墨書がみられるが、墨が薄いため文字は判読できない。13は口径17.0cm。つまみは欠損する。11～13は、いずれも重ね焼きの痕跡がみられる。14は平瓶の底部。内面は全体的に有機物が付着していた<sup>2)</sup>。この他に把手片1点を確認している。接合はできないが、内面に有機物が付着しており、同一個体とみられる。

15は緑釉陶器羽釜。口縁部から羽上面にかけてにぶい橙色の緑釉が確認できる。軟質で内面は浅黄橙色を呈す。羽下面から胴部にかけては煤が付着しており、実際に使用していたことがわかる。

16は円面硯の脚部。須恵質。復元脚部底径は25.8cmを超える。脚部に短辺約0.9cmの長方形の透かし孔を配す。また、小片のため図化していないが、円面硯の脚部とみられる破片を16の他に4点確認している。いずれも接合はできないが、胎土・形状などから同一個体とみられる。

15・16はやや古い様相を呈すが、基本的な時期は京都1B段階に属する。

建物3柱穴181

溝247

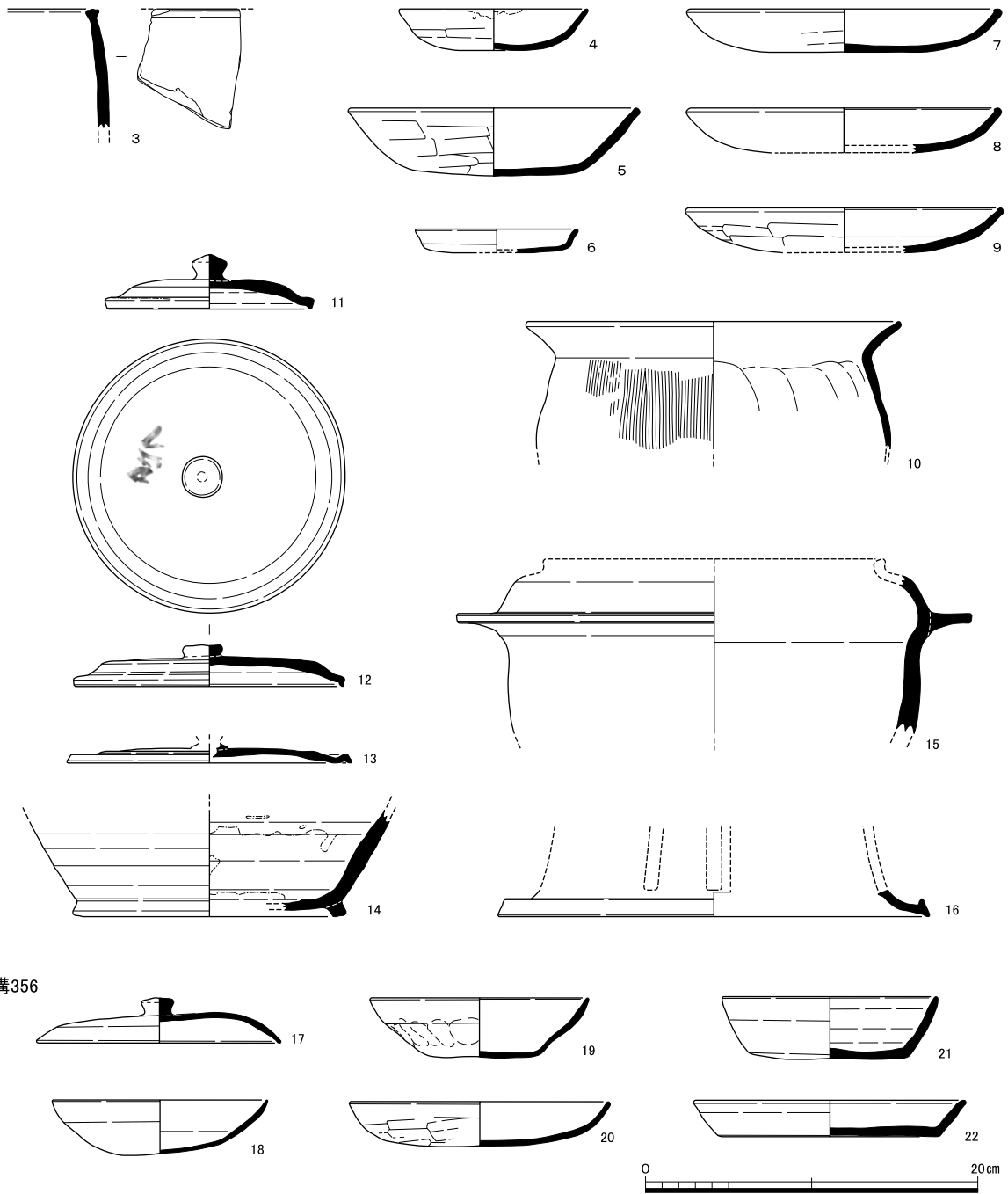


図14 建物3、溝247・356出土土器・土製品実測図（1：4）

溝356出土土器（17～22） 17～20は土師器。17は土師器蓋。ボタン状のつまみがつく。18は椀A。口径12.9cm、器高3.4cm。摩滅のため調整不明。19は杯A。口径13.0cm、器高3.6cm。外面はオサエ。20は皿A。口径15.5cm、器高2.7cm。外面はケズリ。

21・22は須恵器。21は杯。口径12.8cm、器高3.8cm。底部ヘラケズリ。22は皿。口径16.2cm、器高2.2cm。内面に火襻の痕跡が残る。

時期は京都1B段階に属する。

### (3) 瓦 (図15)

丸瓦(瓦1) 凹面に布目が残る。白色砂粒や石英などを多く含むが、密な胎土である。焼成は硬く、焼け締まっている。溝247から出土した。

### (4) 木製品 (図16・17、表4)

建物2・4、柱列1・3では、柱根11点が残存していた。すべての柱根の樹種同定を行い、残存状態の良好な2点(木1・2)を図化した。建物・柱列の柱根はすべてヒノキであったが、建物4の柱穴147の柱根の下部から出土した板材はスギであった。

また、溝247で出土した多量の炭化物のうち未炭化であった木材もヒノキであった。

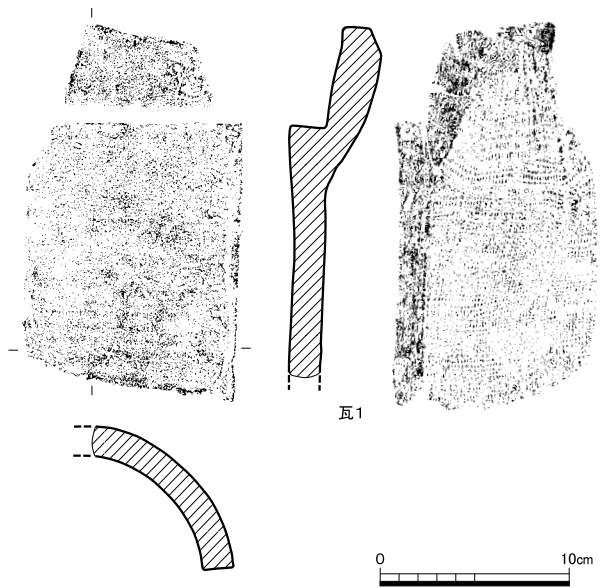


図15 丸瓦拓影及び実測図(1:4)

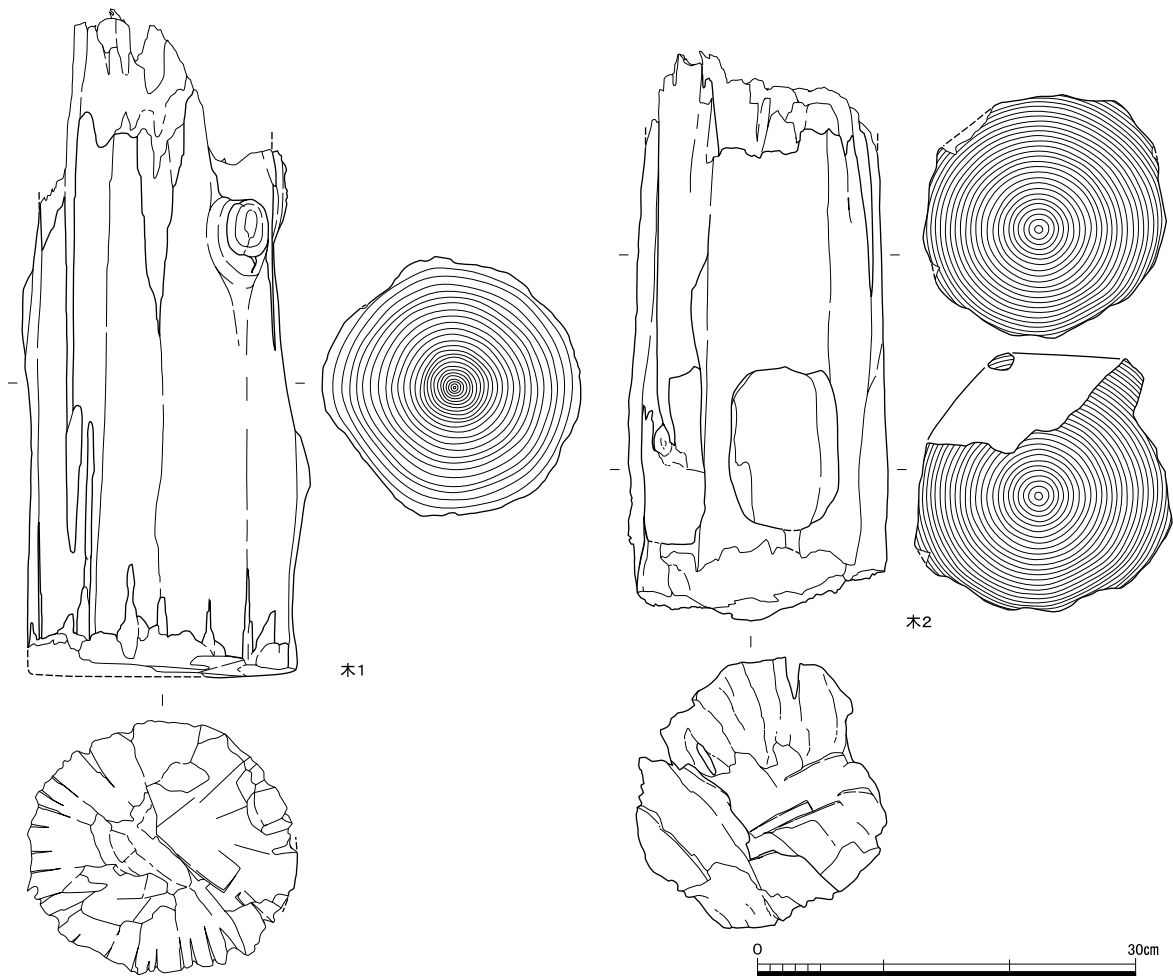


図16 木製品実測図(1:6)



図17 建物4出土柱根

柱根（木1・2）木1は建物4の柱穴127の柱根である。残存長45.2cm、径約20.6cm。柱の下端部には、縦12.5cm、横8.5cmの穴が2方向からあいており、その穴は柱の内部で接続していた。運搬時に縄をかけるえつり穴とみられる。木2は建物4の柱穴147の柱根である。残存長53.0cm、径約22.2cm。木1・2ともに底面には工具痕跡が残る。

表4 出土木材の樹種一覧表

出土遺構		種類	樹種	備考
建物2	柱穴163	柱根	ヒノキ	
建物4	柱穴125	柱根	ヒノキ	
	柱穴127	柱根	ヒノキ	木1
	柱穴147	柱根	ヒノキ	木2
	柱穴147	柱根下面の板材	スギ	
	柱穴243	柱根	ヒノキ	
柱列1	柱穴101	柱根	ヒノキ	
	柱穴103	柱根	ヒノキ	
	柱穴202	柱根	ヒノキ	
	柱穴204	柱根	ヒノキ	
	柱穴206	柱根	ヒノキ	
柱列3	柱穴234	柱根	ヒノキ	
溝247		未炭化の木材	ヒノキ	多量の炭化物と出土

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B A B C	A B C	A B C	A B A B C	A B C	A B C	A B C	A B A B A B	A B A B	A B	

- 2) 龍谷大学文学部歴史学科の山田卓司氏に依頼し、顕微鏡観察・蛍光X線分析を行った。蛍光X線分析では元素が測定できなかったため、付着物の特定はできなかった。

## 5. まとめ

### (1) 調査地の歴史の変遷

**弥生時代** 土坑331を検出した。土坑からは弥生時代中期後葉の壺が出土した。

調査地は弥生時代の遺跡の範囲には含まれていないが、調査地の北東側には弥生時代から古墳時代の集落跡である西院遺跡、北西側には弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡が存在している（図1）。今回の調査地で弥生土器が出土したことから、これらの遺跡がさらに広がりをもつ可能性がある。

**平安時代** 建物1～7、柱列1～3、溝247・356、落ち込み357を検出した。

調査区北端で検出した溝356より南には区画施設が認められないことから、建物1～7は同一宅地の建物群とみられる。この溝356以南の遺構の時期は、8世紀末から9世紀初頭までに収まる。この時期の宅地と建物に関しては、次項で詳述する。

9世紀初頭に建物群が廃絶した後は、平安時代中期・後期の遺構や遺物が確認できていないことから、この時期は人間活動が極めて希薄であったことがわかる。

**中世** 溝114・118や耕作溝を検出した。遺構の密度や、遺物も非常に少なく、調査地には耕作地が広がっていたとみられる。

### (2) 平安京右京六条三坊六町の宅地（図18）

平安京右京六条三坊六町（以下、「六町」とする）では、これまで2004年度にも調査が行われている。今回の調査では、平安時代前期の掘立柱建物7棟、掘立柱列3条、溝を検出した。2004年度調査でも、平安時代前期の掘立柱建物2棟、井戸1基と井戸の覆屋となる掘立柱建物を検出している。2004年度の遺構の年代は、井戸の出土遺物により8世紀末から9世紀初頭とみられ、今回の調査で検出した遺構と同時期とすることができる。

これらの調査成果から、六町における宅地のあり方について検討する。

**建物の特徴**（表5） 六町の南半部では、今回の調査と2004年度調査と合わせて9棟の掘立柱建物を検出した。これらの建物の属性を表5にまとめた。六町内で検出した建物の特徴は以下の通りである。

- ・平安京の標準的な桁行柱間である7～8尺よりもやや広い9尺の建物（建物1～5）が多い<sup>1)</sup>。
- ・庇をもたない建物（建物1～3・5・6）が多い。庇付は建物4・7、建物SB1（2004年度）の3棟である。
- ・建物の面積は約40～90㎡のもの（建物1～3・6・7）が多い。100㎡を超えるのは建物4、建物SB1（2004年度）の2棟である。

**建物の先後関係と配置** 今回の調査で検出した建物のうち、建物1と2、建物6と7は同じ場所に重なるように位置しており、同一宅地内における建て替えの可能性が高い。柱穴の重複関係から

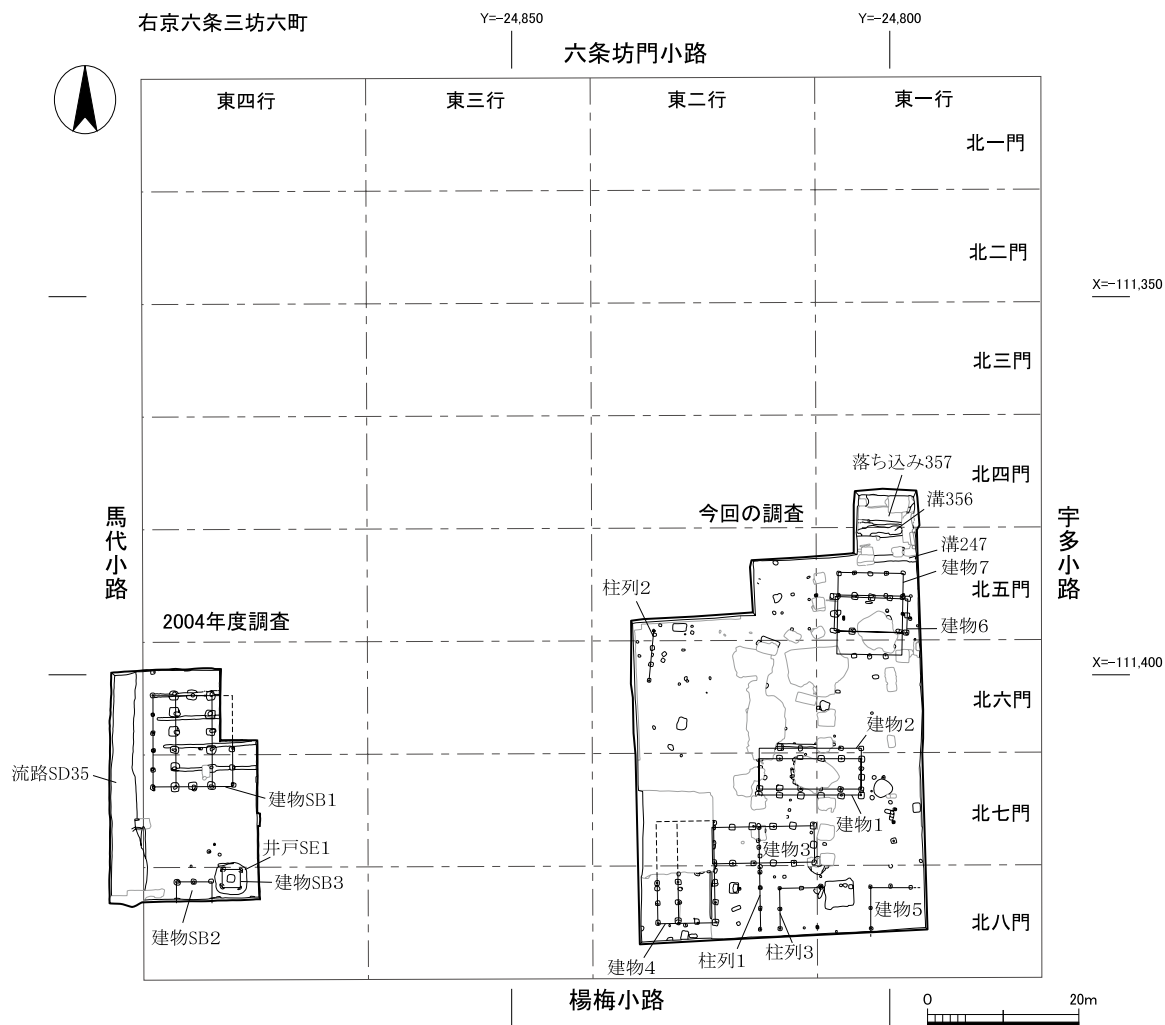


図18 平安時代の平安京右京六条三坊六町遺構配置図 (1 : 1,000)

表5 平安京右京六条三坊六町の建物一覧表

調査年度	遺構名	方向	梁行			桁行			庇		面積 ( )内は 身舎	柱穴 掘形	方位
			間数	規模	柱間	間数	規模	柱間	方向	出			
2022年度 (今回の調査)	建物1	東西棟	2間	4.8m	2.4m (8尺)	5間	13.5m	2.7m (9尺)			64.8㎡	0.7~ 0.9m	正方位
	建物2	東西棟	2間	5.4m	2.7m (9尺)	5間	13.5m	2.7m (9尺)			72.9㎡	0.6~ 0.8m	正方位
	建物3	東西棟	2間	4.8m	2.4m (8尺)	5間	13.5m	2.7m (9尺)			64.8㎡	0.7~ 0.9m	北で西に1度
	建物4	南北棟	2間	4.8m	2.4m (8尺)	5間	13.5m	2.7m (9尺)	西	2.7m(9尺)	101.25㎡ (64.8㎡)	0.6~ 0.8m	北で西に1度
	建物5	—	2間	5.4m	2.7m (9尺)	2間 以上	5.4m 分	2.7m (9尺)			29.16㎡ 以上	0.5m	正方位
	建物6	東西棟	2間	4.5m	2.25m (7.5尺)	4間	9.6m	2.4m (8尺)			43.2㎡	0.6~ 0.8m	北で東に2度
	建物7	東西棟	2間	4.8m	2.4m (8尺)	4間	8.4m	2.1m (7尺)	北・南	3.0m(10尺)	89.12㎡ (40.32㎡)	0.5~ 0.6m	北で東に1度
2004年度	SB1	南北棟	2間	4.8m	2.4m (8尺)	5間	12.0m	2.4m (8尺)	東・西	東2.7m(9尺)、 西3.0m(10尺)	126㎡ (57.6㎡)	1.0~ 1.2m	正方位
	SB2	南北棟	2間	4.8m	2.4m (8尺)	1間 以上	2.4m 分	2.4m (8尺)			11.52㎡ 以上	0.7m	正方位

建物7は建物6よりも新しいことがわかるが、建物1・2の先後関係は不明である。また、建物3と建物4は、柱穴の重複関係から建物4が新しいことがわかる。

建物1・2の先後関係に関しては、近接する建物3・4の柱掘形を比較すると、旧段階の建物3は一辺0.7～0.9m、新段階の建物4は一辺0.6～0.8mであり、旧段階の方が一回り大きいことがわかる(表5)。建物1の掘形は一辺0.7～0.9mと建物3に近似しており、建物2は一辺0.6～0.8mと建物4に近似することから、建物2の方が建物1よりも新しい可能性が高い。ただし、今回示した各建物の新旧は、それぞれの建物の重複関係からみた時間差であり、この宅地が新旧2時期(旧段階：建物1・3・6、新段階：建物2・4・7)に分けられるとは限らない。また建物1・2の西柱列と柱列1は、柱筋が通ることから建物1・2のいずれかもしくは両方と併存していたとみられる。この柱列1の存在によってその東西の空間は分化されている。

そして、建物1～4と建物6または建物7の間には堀や溝などの区画施設が存在しないことから、これらの建物は同一宅地に同時期に存在していたと考えられる。

**宅地境界施設** 今回の調査では、六町の南北中心位置で溝356を検出した。宅地の中を区画する施設の可能性もあるが、宅地内の溝としては溝の幅が1.5mと広いことから、小径の側溝など1町を南北に区画する施設の可能性が高いと考える。なお宅地境界の施設としては、小径の他に溝<sup>2)</sup>や柵<sup>3)</sup>などが平安京内で確認されている。また、溝356以南は、全体的に建物が配置されているため、六町の南東部は少なくとも1/4町以上の宅地であったことがわかる。

**建物構成と宅地規模** 平安京における宅地の主屋は、一般的に庇をもつ一番規模の大きい東西棟建物となる<sup>4)</sup>。宅地規模が1/4町とすると、建物1が主屋に、建物6・7が副屋に相当するとみられる。ただし、柱列1により区画された西側の空間に一番規模の大きい建物4が存在しており、建物1が主屋とは断定できない。宅地規模が1/2町とすると、建物1～3・6は庇をもたず建物の面積が小さい、建物7は庇をもつものの桁行の柱間が狭く床面積も狭いため、これらが主屋とは考えにくい。六町域で確認されている建物で、最も規模の大きいのは2004年調査の建物SB1であるが、この建物は東西両庇をもつものの南北棟であることから、これも宅地の主屋とは考えにくい。このことから、これまでに検出した建物には宅地の主屋と想定できるものはなく、主屋の存在するエリアは今回の調査地の西側の可能性が高い。

**宅地の廃絶** 今回調査した六町の宅地は、出土遺物から9世紀第1四半期には廃絶し、その後、平安時代を通して宅地として利用されることはなかった。

平安京の右京は、10世紀後半には既に衰退していたことが、慶滋保胤『池亭記』に記されているが、発掘調査成果からも10世紀中頃には基本的に右京域での宅地利用はなされないことが明らかとなっている<sup>5)</sup>。衰退の理由としては、河川の氾濫や右京域の大部分が低湿地であったことなどにより、元来、居住に適さない土地であったことが挙げられてきた。

今回の調査地の基盤層(黒褐色粘土層～オリーブ褐色シルト)は、厚さ0.5～0.7mの固く締まった透水性の低いシルトである。今回、この基盤層の層相分析と放射性炭素年代測定を行った。その結果、基盤層は扇状地の氾濫原堆積物に由来しており、その形成時期は、縄文時代後期前葉から中

葉に位置付けられることがわかった(付章 自然科学分析 6.小結参照)。また、付章の図11からは、調査地周辺は、等高線の間隔が広く傾斜のない平坦な地形であることが読み取れる。これらのことから調査地周辺は、透水性の低い地盤と低平な地形環境から、排水不良を引き起こしやすい土地であったことがわかる<sup>6)</sup>。

2004年度調査では、馬代小路東側溝の位置に、幅5 m以上の流路SD35を確認しているが(図18)、これは馬代小路の側溝が周辺の排水を行うために拡幅された結果とみられ、調査地周辺の水はけが悪かったことを物語っている。

調査地である六町南半部の居住者は、平安京遷都に伴い、班給された宅地に居を構えたものの、降雨の度に水に浸かるような場所であったために、平安時代初期のうちに早々に退去したことが推測できる。

#### 註

- 1) 南 孝雄「平安京掘立柱建物の特性－庇付建物の展開－」『研究紀要1』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2) 堀内明博・吉崎 伸「平安京右京二条三坊1」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 3) 鈴木康高『平安京右京七条一坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 4) 註1)に同じ
- 5) 南 孝雄「衰退後の右京－十世紀後半から十二世紀の様相－」『平安京の地域形成』京都大学学術出版会 2016年
- 6) 発掘調査中も降雨の際は非常に水はけが悪く、調査区内は滞水していた。



# 付章 自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

## (1) 放射性炭素年代測定

### 1. はじめに

今回の自然科学分析では、調査区（右京六条三坊六町跡）の遺跡基盤層の堆積年代を検討する目的で、基盤層表層の黒褐色土壌の腐植について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料

遺跡基盤層の観察と試料採取は、2箇所の深掘トレンチで行った。深掘トレンチには、トレンチ1とトレンチ2とする。深掘トレンチの位置を、図1・3に示す。また、図2にトレンチ1とトレンチ2のそれぞれの壁面での堆積状況を柱状断面図で示す。測定試料は、トレンチ1の遺跡基盤層表層の黒褐色土壌から採取した（図1・7）。

深掘トレンチの壁面構成層は、層相から、深掘トレンチ下部と深掘トレンチ上部の2つに区分で

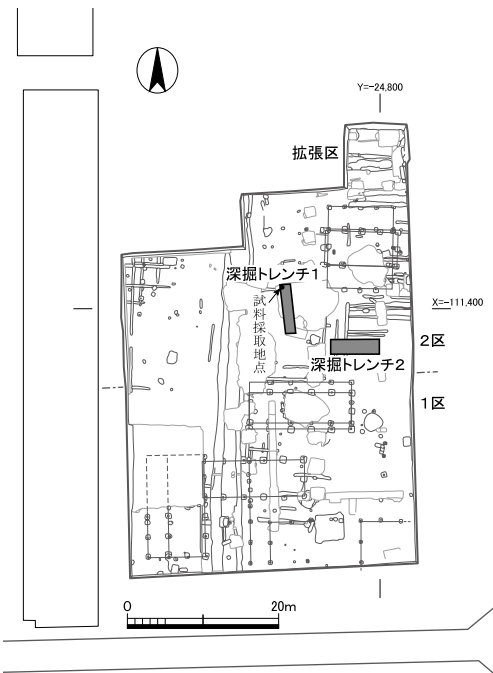


図1 深掘トレンチ位置（1：1,000）

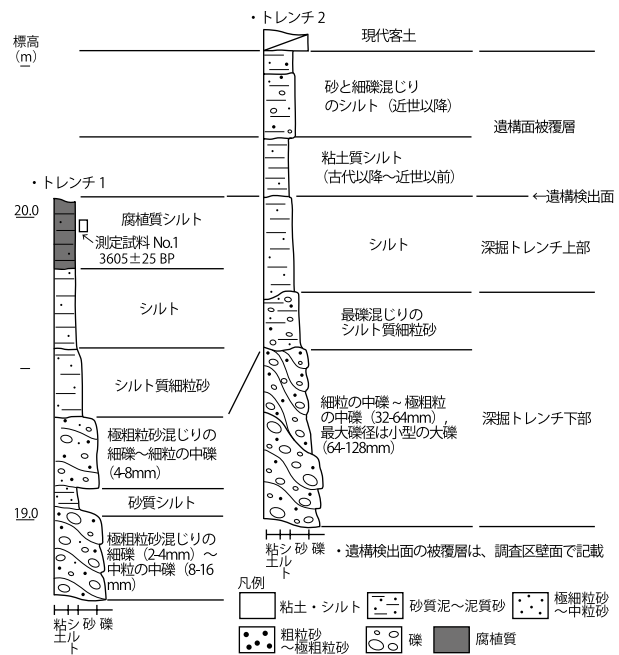


図2 深掘トレンチの堆積状況と測定試料の採取位置

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-49760	試料No.1	種類: 土壌 状態: wet	湿式篩分: 106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)



図3 深掘トレンチ1・2



図4 2区東壁の遺構面被覆層



図5 深掘トレンチ1壁面の堆積状況

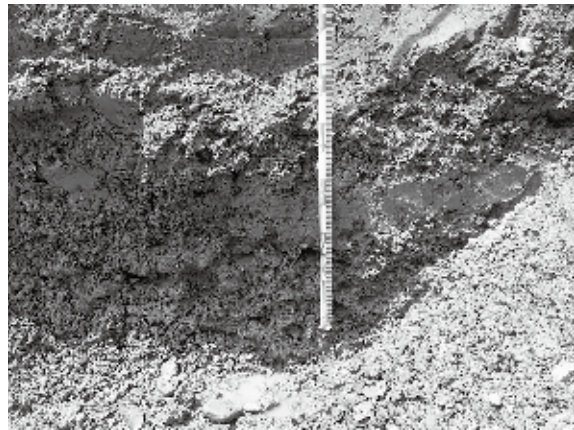


図6 深掘トレンチ1下部の堆積状況

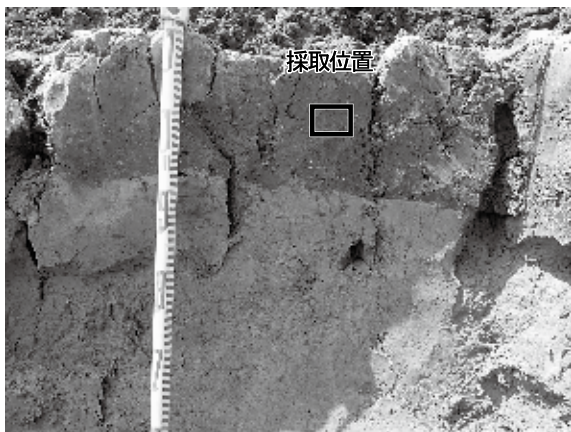


図7 深掘トレンチ1上部の測定試料の採取位置



図8 深掘トレンチ2の堆積状況

きる（図2）。深掘トレンチ下部は、フォーセット斜交層理（葉理）が発達する細礫～中礫からなる礫層を主体とする（図6・8）。トレンチ1では、礫層中に泥層が挟在する（図6）。深掘トレンチ上部は、シルト主体の塊状無層理の泥層が堆積する。削平される以前の地表が相対的に低かったと推測される領域には、トレンチ1のように深掘トレンチ上部の表層部に、腐植質に富む暗色帯をなす泥質土壌化層準が載る（図5）。今回は測定試料として、トレンチ1の暗色帯をなす泥質土壌化層準を構成する腐植を採取した（図7）。



### 3. 方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。測定試料を図9に示す。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### 4. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、図10に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲

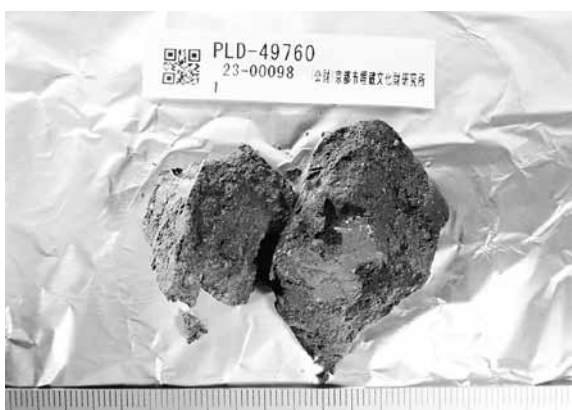


図9 測定試料No.1（PLD-49760）

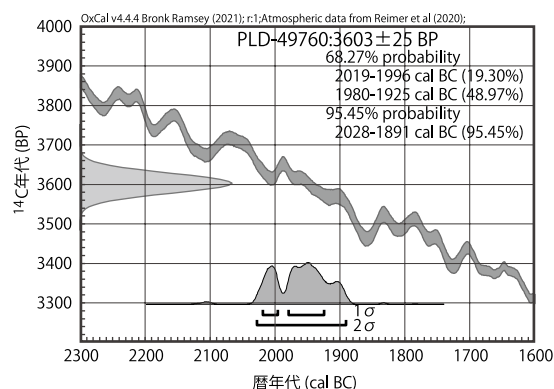


図10 暦年較正結果

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-49760 試料No.1	-24.48 $\pm$ 0.14	3603 $\pm$ 25	3605 $\pm$ 25	2019-1996 cal BC (19.30%) 1980-1925 cal BC (48.97%)	2028-1891 cal BC (95.45%)

であり、同様に  $2\sigma$  暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

## 5. 考察

### (1) 年代値

試料 No. 1 (PLD-49576) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3605 \pm 25$  BP、較正年代が 2028-1891 cal BC (95.45%) である。測定結果については、小林 (2017) による縄文時代の放射性炭素年代値と土器型式および年代観にもとづくと、縄文時代後期前葉～中葉に対比できる。

### (2) 深掘トレンチの堆積状況

深掘トレンチ下部の礫層で発達するフォーセット斜交層理 (葉理) は、扇状地河川において、流路内の砂礫堆の掃流移動によって形成される網状河川堆積物に典型的に形成される (増田, 2019a; 柴田, 2022)。今回の調査区は、植村 (2004) によれば、京都盆地内に発達した扇状地上に位置すると判断できる。さらに、深掘トレンチ下部と同様の岩質と堆積構造を示す砂礫層は、増田 (2019b) の鴨川の扇状地での詳細な研究結果でも確認できる。

よって、深掘トレンチ下部の礫層は、調査区付近で発達した扇状地面を埋積した網状河川堆積物と捉えられる。礫層を被覆するシルト主体の泥層の深掘トレンチ上部は、網状河川の流路が埋没した後、氾濫原へと変化して、周辺から浮流洪水堆積物が供給されて形成されたと判断できる。

なお、古代以降の削平を免れた、相対的に低所に位置する深掘トレンチ 1 では、トレンチ上部の表層に暗色帯をなす泥質の土壌化層準が残存する。この土壌化層準を構成する腐植からは、縄文時代後期前葉～中葉の年代値が得られた。また、土壌化層準の上面は、古代の遺構検出面に相当する。今回得られた年代値と深掘トレンチの層相および発掘調査の結果から、調査区付近の氾濫原の堆積環境は、縄文時代後期前葉～中葉には既に安定化していたと捉えられる。さらに、古代の遺構検出面の被覆層は、泥質でかつ層厚も薄い。このような堆積状況から、調査区付近では、縄文時代後期前葉～中葉以降から基本的に安定した堆積環境が維持されており、洪水の発生頻度が非常に少なく、かつ粗粒な洪水堆積物が流入するようなイベントは生じていなかったと考えられる。

### (3) 調査区付近の地形について

平安京域の地形発達史については、河角 (2004, 2007) などの歴史時代の詳細な地形学的研究が存在する。河角 (2004) の地形分類図によると、今回の調査区は、完新世段丘面のⅢ面上に立地する (図 11)。完新世段丘Ⅲ面は、扇状地面として発達した地形面である。本面は、縄文時代晩期以前に地形面の発達が生じたとされる。完新世段丘Ⅲ面の構成層は、深掘トレンチで確認した遺跡基盤層に相当する。このうち、地形面を発達させた扇状地堆積物は、深掘トレンチ下部の礫層に相当する。今回実施した放射性炭素年代測定によって、調査区付近の扇状地氾濫原は、縄文時代後期前葉～中葉には安定した氾濫原に転じていたと捉えられる。この結果は、河角 (2004) による地形発達史的研究とも概ね調和的であるとともに、完新世段丘Ⅲ面の安定化の時期がやや古くなる可能

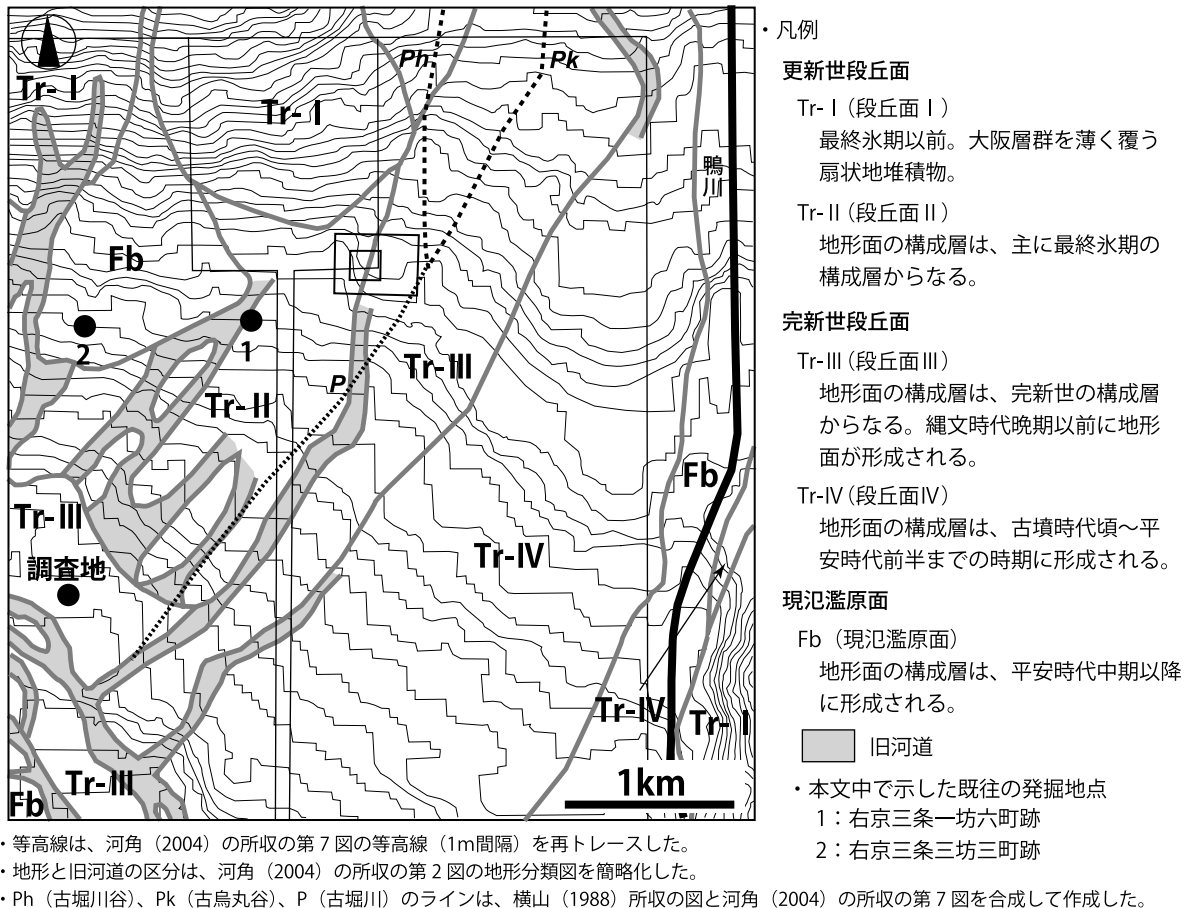


図11 調査地周辺の地形学図

性を示している。よって、調査区付近の扇状地面は、縄文時代後期前葉～中葉以前に既に離水傾向、すなわち段丘化していたと判断できる。今回の調査では、礫層から年代測定試料が得られなかった。今後、付近の発掘調査において継続的に深掘調査を実施し、礫層を含めて遺跡基盤層の年代値を明らかにしていく必要があると思われる。

なお、完新世段丘Ⅲ面の北側には、最終氷期に発達して、その後に段丘化した扇状地面である更新世段丘Ⅱ面が分布する。右京三条一坊六町跡の10次調査の報告書（京都市埋蔵文化財研究所，2013）に示された詳細な地質情報（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013）によると、10次調査では、古代の遺構確認面の下位-1.8mにおいて、噴出年代が約3.0万年前（Smith et al., 2013）の始良Tn火山灰（AT）のテフラの挟在が確認されている。また、室町時代以降の氾濫原の急激な埋積により、現況氾濫原面に区分される領域に位置する右京三条三坊三町跡では、古代の遺構検出面の下位-1.0mの砂礫層に挟在する腐植質シルトから、24090 <sup>14</sup>C BPの年代値が得られている（河角・小野，2009）。この年代値は、最終氷期最寒冷期に相当し（工藤，2012）、後期旧石器時代中葉に対比できる（森先，2022）。

更新世段丘Ⅱ面上の調査区から得られているこのテフラと放射性炭素年代値は、本面が最終氷期後半に発達した状況を支持している。今回の調査区の北側の近くでは、形成時期が相対的に古い、一段高く段丘化した扇状地面の存在が確認できる。

## 6. 小結

遺跡基盤層の放射性炭素年代測定と、河角（2004、2007）の平安京の地形発達史にもとづくと、右京六条三坊六町跡の調査区は、縄文時代後晩期に段丘化した扇状地面上に位置すると判断できる。深掘トレンチ上部のシルト主体の泥層は、段丘化前後に堆積した扇状地の氾濫原堆積物である。削平を免れた氾濫原堆積物の表層には、縄文時代後期前葉～中葉の年代値を示す暗色帯をなす土壌化層準が形成される。この土壌化層準の直上が古代以降の遺構検出面に相当しており、調査区付近は、縄文時代後期前葉～中葉以降にはかなり安定した堆積環境が維持される土地条件であったと考えられる。

ところで、通常段丘化した地形面では、地下水位が低下する。ただし、扇状地では、埋没する砂礫が地下水の水みちとなるため、地下水位や地下水の水みちは地形面の段丘化だけでは説明できない。この点については、周辺の井戸遺構の状況や古水文学的な検討をふまえ、古代における右京域の人々の水利用の実態を考えていく必要があると思われる。

さらに、深掘トレンチ上部のシルト主体の氾濫原泥層については、ある程度の層厚をもって層状に累重し、古代以降の遺構検出面を形成している。シルト主体の氾濫原泥層は、砂質層準よりも透水性が不良と考えられる。透水性が相対的に低い泥質堆積物でも、植物や動物による土壌化作用で形成された孔隙を伴う土壌構造により、透水性が確保される場合がある（宮崎，2014）。ただし、人間の地表攪乱で土壌構造が破壊されると、透水性は低下する（宮崎，2014）。古代以降の遺構検出面をなす氾濫原泥層は、今回の放射性炭素年代測定により、縄文時代後期前葉～中葉以前に形成されるとともに、当該期前後に土壌生成作用が強まったと考えられる。よって、縄文時代後期前葉～中葉以降には、調査区の遺構検出面付近の氾濫原泥層において、土壌構造が累積的に発達していくような状況であったと推察できる。よって、調査区付近では、雨水などに対する地表排水性がある程度確保されていたと予想される。このような地表環境下において、本調査区では、平安時代前期に宅地造成などの人間活動が顕著化する。平安時代前期の地表面であった氾濫原泥層の最上部付近では、当該期の人間活動に伴う地表攪乱による土壌構造の破壊によって、地表排水性の低下が生じた可能性があるが、現状においては想定段階にとどまる。平安時代前期の地表排水性の不良化に伴う地表環境の変動については、遺構の埋没過程などから、今後さらに検証を試みたい。

（パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男）

### 引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.

河角龍典 (2004) 歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－. *京都歴史災害研究*, 1, 13～23.

河角龍典 (2007) 平安京の地形環境と災害. 立命館大学21世紀COEプログラム・神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議ジョイント・ワークショップ編「歴史災害と都市－京都・東京を中心に－」報告書：3-10, 立命館大学・神奈川大学.

河角龍典・小野映介（2009）平安京右京三条三坊三町の発掘調査から見た最終氷期以降の紙屋川（天神川）扇状地の地形発達史.財団法人京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条三坊三町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004-2」：63-66, 財団法人京都市埋蔵文化財研究所.

小林謙一（2017）縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－. 263p, 同成社.

工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史. 373p, 新泉社.

京都市埋蔵文化財研究所（2013）平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-9. 229p, 財団法人京都市埋蔵文化財研究所.

増田富士雄（2019a）神戸市垂水の沖積層上部に対する堆積相解析の例. 増田富士雄編著「ダイナミック地層学 大阪平野・神戸 六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析」：41-50, 近未来社.

増田富士雄（2019b）京都盆地の扇状地堆積物. 増田富士雄編著「ダイナミック地層学 大阪平野・神戸 六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析」：149-158, 近未来社.

宮崎 毅（2014）土壌への雨水浸透 環境池水読本. 122p, 東銀座出版社.

森先一貴（2022）旧石器社会の人類生態学. 290p, 同成社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20, 日本第四紀学会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（2013）自然科学分析. 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-9」：133-171, 財団法人京都市埋蔵文化財研究所.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . Radiocarbon, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

柴田健一郎（2022）河川堆積相. 日本堆積学会監修・伊藤 慎編「図説 堆積構造の世界」：175-178, 朝倉書店.

Smith, V. C., Staff, R. A., Blockley, S. P. E., Bronk Ramsey, C., Nakagawa, T., Mark, D. F., Takemura, K., Danhara, T., Suigetsu 2006 Project Members (2013) Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews, 67, 121-137.

植村善博（2004）京都盆地. 太田陽子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編「日本の地形 6 近畿・中国・四国」：79-80, 東京大学出版会.

横山卓雄（1988）平安遷都と鴨川つけかえ：歴史と自然史の接点. 235p, 法政出版.

## (2) 花粉分析

### 1. はじめに

平安京右京六条三坊六町跡の調査区において、古環境を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の高植生について検討した。

### 2. 試料と方法

分析試料は、平安時代前期の8世紀末から9世紀初頭に埋没した溝356埋土から採取された2試料(No.1、No.2)である(表3、図12)。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、主要な分類群の単体標本(PLC.3873~3880)を作製し、写真を図14に載せた。

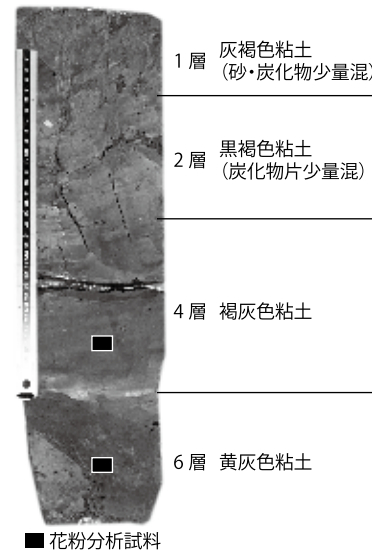


図12 溝356埋土の採取ブロック試料断面写真と分析試料の採取位置

### 3. 結果

2試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉19、草本花粉14の、総計33である。これらの花粉・胞子の一覧表を表4に、花粉分布図を図13に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図および表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

No.1とNo.2では、樹木花粉においてスギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ。草本花粉ではイネ科の産出が目立つ。また、No.2では栽培植物のソバ属が得られている。

表3 分析試料一覧

遺構	試料No.	層位	時期	岩質
溝356	1	4層	平安時代前期 8世紀末から9世紀初頭	褐灰色(10YR4/1)粘土
	2	6層		黄灰色(2.5YR4/1)粘土



表4 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	1	2
樹木			
<i>Abies</i>	モミ属	14	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	5	4
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	6	7
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	6	2
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	65	63
Taxaceae—Cephalotaxaceae—Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	5	17
<i>Pterocarya—Juglans</i>	サワグルミ属—クルミ属	—	2
<i>Carpinus—Ostrya</i>	クマシデ属—アサダ属	6	3
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2	—
<i>Fagus</i>	ブナ属	—	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	14	15
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	71	82
<i>Castanea</i>	クリ属	5	8
<i>Castanopsis—Pasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	26	3
<i>Ulmus—Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	4	3
<i>Acer</i>	カエデ属	—	1
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	—	2
Ericaceae	ツツジ科	1	—
草本			
<i>Typha</i>	ガマ属	1	—
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	3	2
Gramineae	イネ科	126	105
Cyperaceae	カヤツリグサ科	—	7
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	—	1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria—Echinocaulon</i>	サナエタデ節—ウナギツカミ節	2	—
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	—	1
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	8	—
Caryophyllaceae	ナデシコ科	—	1
Brassicaceae	アブラナ科	2	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属	—	2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	6	2
Tubuliflorae	キク亜科	—	2
Liguliflorae	タンポポ亜科	2	—
Arboreal pollen	樹木花粉	231	219
Nonarboreal pollen	草本花粉	150	124
Spores	シダ植物孢子	—	—
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	381	343
unknown	不明	3	—

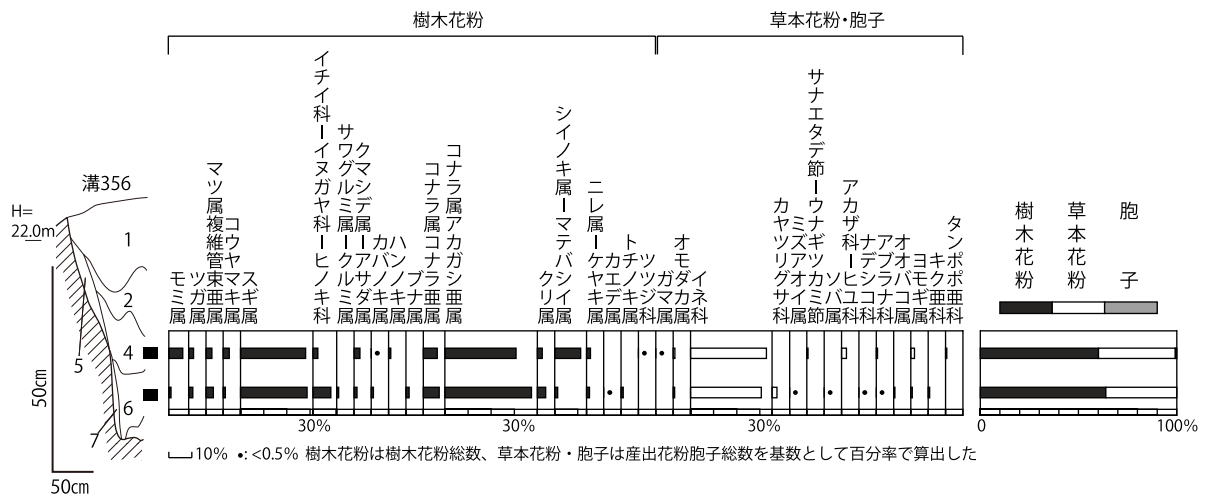


図13 花粉分布図

#### 4. 考察

2 試料ともに樹木花粉では、スギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ。よって、遺跡周辺の丘陵地などにはスギ林やコナラ属アカガシ亜属からなる照葉樹林が分布していた可能性がある。スギ属とコナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ溝356と同様の結果は、右京三条一坊六・七町跡の9世紀初頭および9世紀中頃、9世紀後半の花粉分析結果でも確認できる（京都市埋蔵文化財研究所，2021）。また、4層ではモミ属やシイノキ属-マテバシイ属の産出率が増加しており、4層の堆積時にはモミ属やシイノキ属-マテバシイ属が分布を広げていた可能性がある。

今回の8世紀末から9世紀初頭に埋没した溝356では、二次林要素の高いマツ属複維管束亜属の産出率が低調である。平安京域のマツ属複維管束亜属については、9世紀ころにマツ属花粉が急増する傾向が確認されており、宅地域の庭園などにおけるニヨウマツ類の植栽が既に指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2013）。この指摘を裏付けるように、右京三条一坊六・七町跡では、9世紀後半の庭園池の埋没層である泥炭において、マツ属複維管束亜属の産出率が増加する（京都市埋蔵文化財研究所，2021）。

一方で、右京三条一坊六・七町跡では、10世紀前半の試料でマツ属複維管束亜属の産出率が低い結果が得られており（京都市埋蔵文化財研究所，2021）、10世紀にはマツ属複維管束亜属の減少が推測される。ただし、この結果は1試料のみに基づいており、平安京域の古代におけるマツ属複維管束亜属等の動態については、分析試料の採取層準から出土する土器の詳細な時期比定や遺構分布、さらに分析地点の埋没過程などをふまえ、今後さらに検討を行う必要があると思われる。

草本花粉では、両試料ともにイネ科の産出率が高い。溝356周辺には草本類のイネ科が分布していた可能性がある。また、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属といった好湿性植物の花粉も得られており、溝356周辺の湿潤な場所に生育していた可能性がある。あるいは、オモダカ属やミズアオイ属は水田雑草を含む分類群としても知られており、イネ科の多産と併せて考えると、溝356周辺において水田稲作が行われていた可能性も考えられる。さらに、6層では栽培植物のソバ属が得られているため、溝356周辺でソバ栽培が行われていた可能性がある。ただし、以前の発掘調査によると、平安時代前期の平安京右京六条三坊六町跡あたりは宅地とされているため（京都市埋蔵文化財研究所，2004）、水田やソバ畑が存在していた場所は、比較的離れた場所である可能性がある。あるいは、溝356にソバ殻が捨てられており、そこに付着していたソバ花粉が検出された可能性も考えられる。

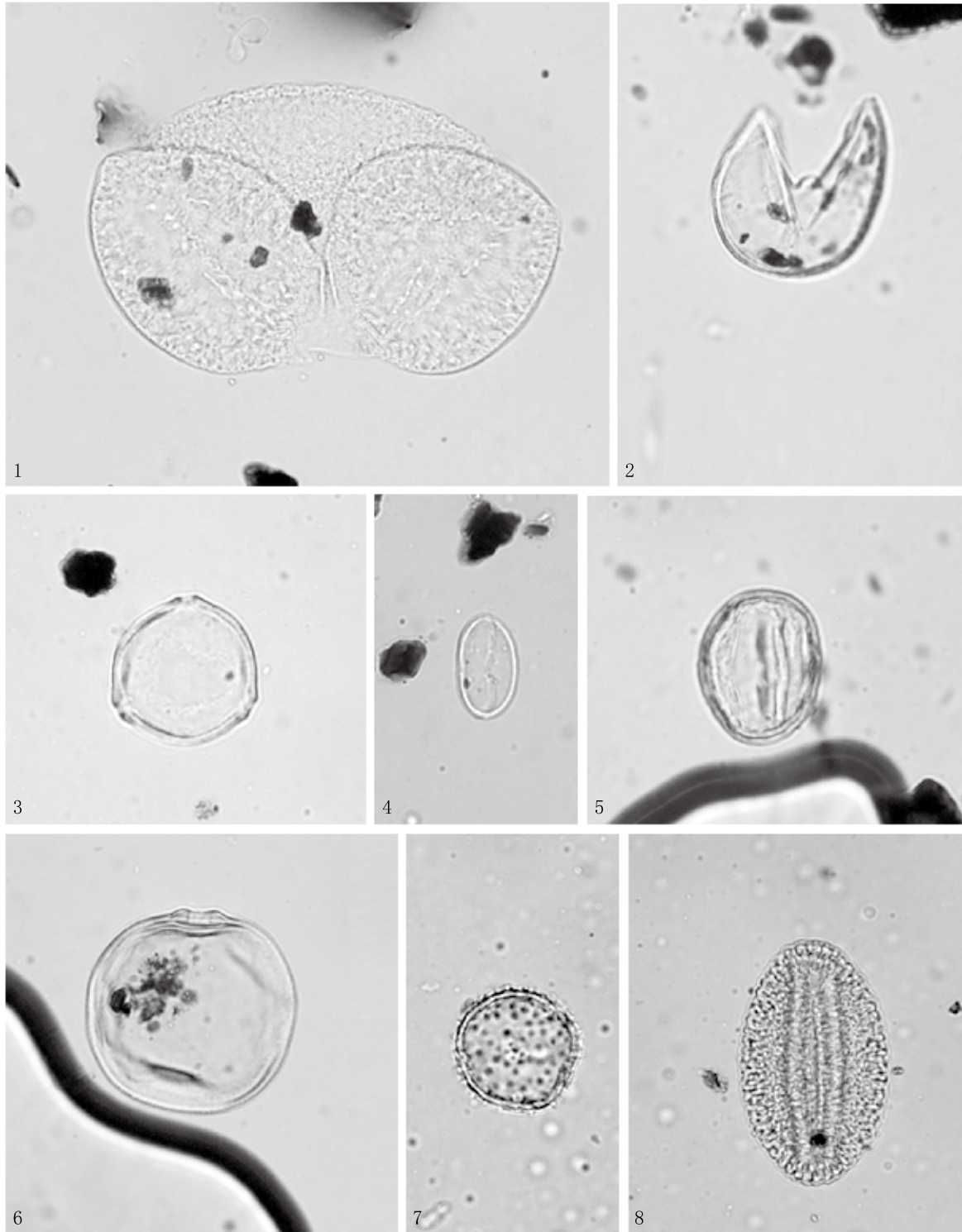
（森 将志）

#### 引用文献

京都市埋蔵文化財研究所（2004）平安京右京六条三坊六町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-2. 18p, 財団法人京都市埋蔵文化財研究所.

京都市埋蔵文化財研究所（2021）平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-10. 101p, 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所.

パリノ・サーヴェイ株式会社（2013）自然科学分析. 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編「平安京右京三条一坊六・七町跡 - 西三条第（百花亭）跡 - 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-9」: 133-171, 財団法人京都市埋蔵文化財研究所.



0.03mm

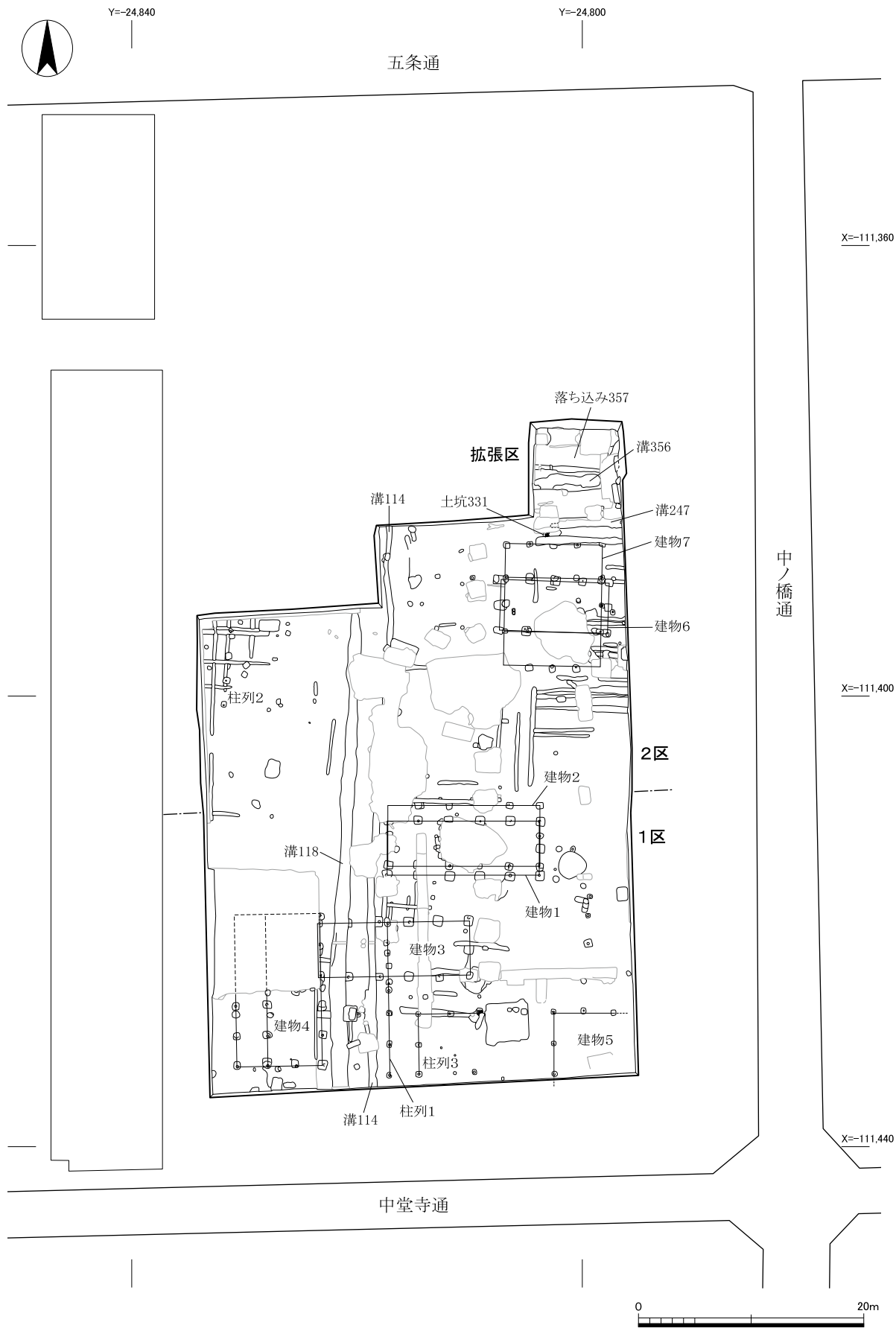
- |                          |                            |
|--------------------------|----------------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属 (PLC.3873)  | 2. スギ属 (PLC.3874)          |
| 3. クマシデ属ーアサダ属 (PLC.3875) | 4. シイノキ属ーマテバシイ属 (PLC.3876) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属 (PLC.3877) | 6. イネ科 (PLC.3878)          |
| 7. オモダカ属 (PLC.3879)      | 8. ソバ属 (PLC.3880)          |

図14 No.2から産出した花粉化石



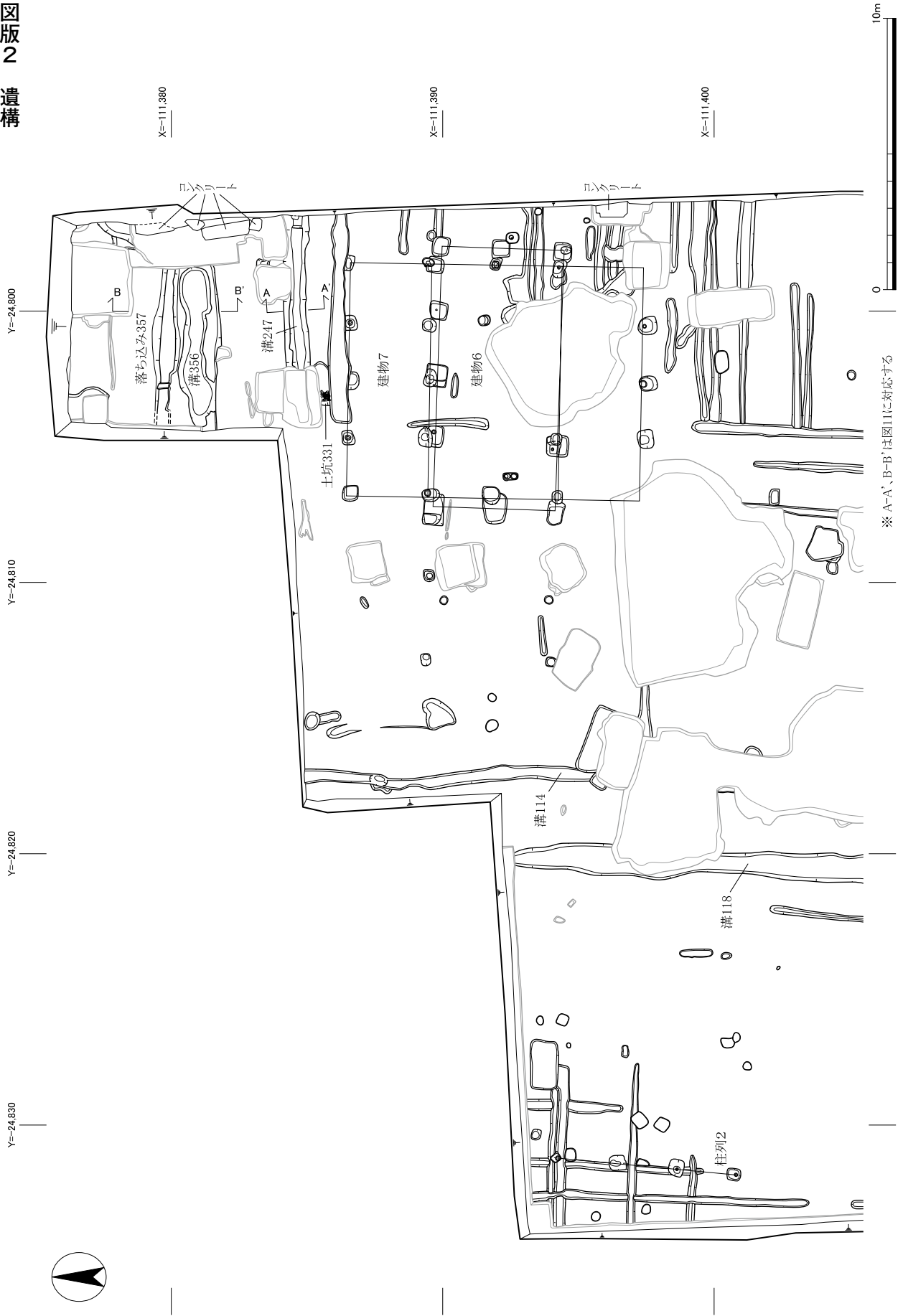
# 圖 版





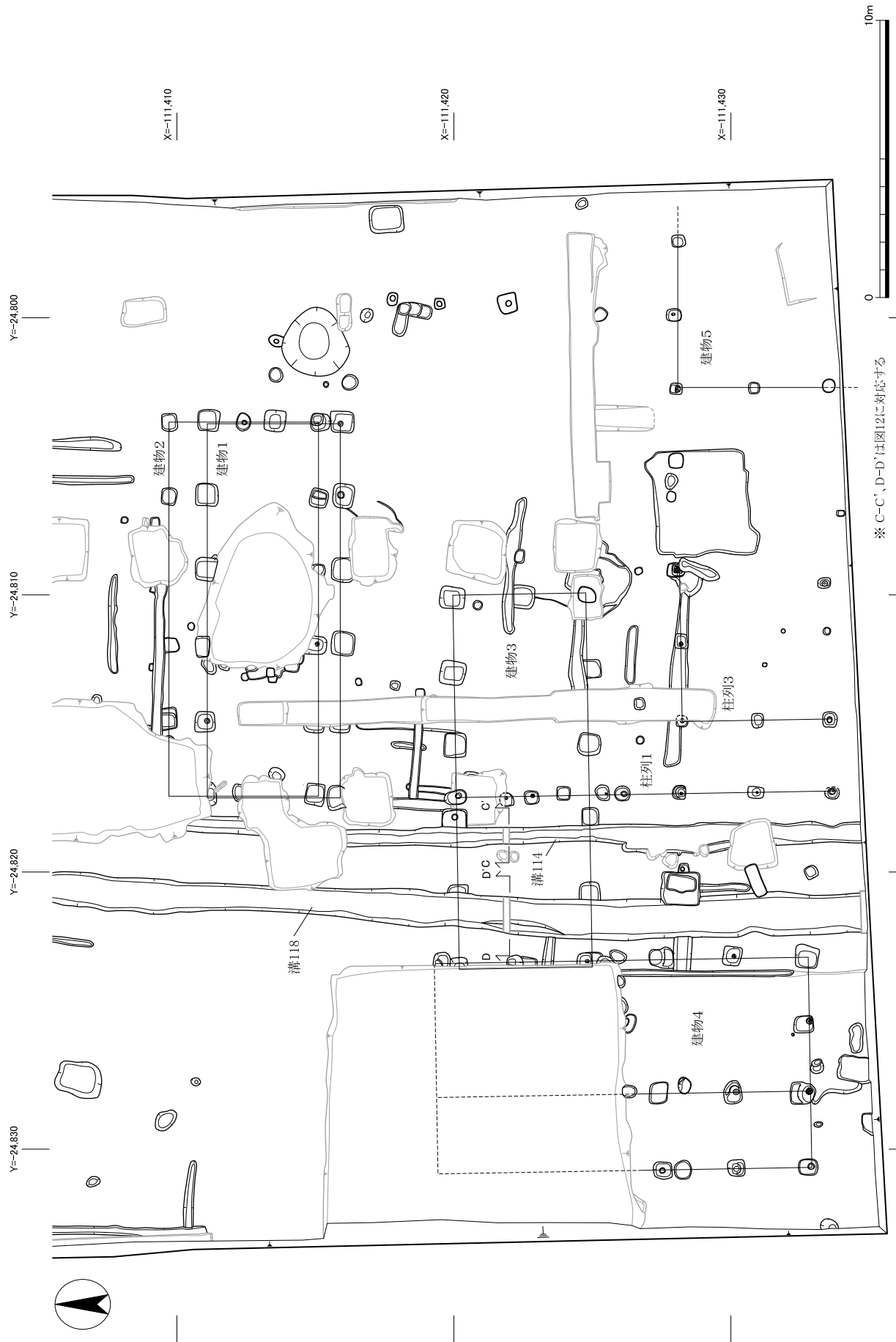
調査区配置図 (1 : 500)

図版2  
遺構



調査区平面図1 (1 : 200)

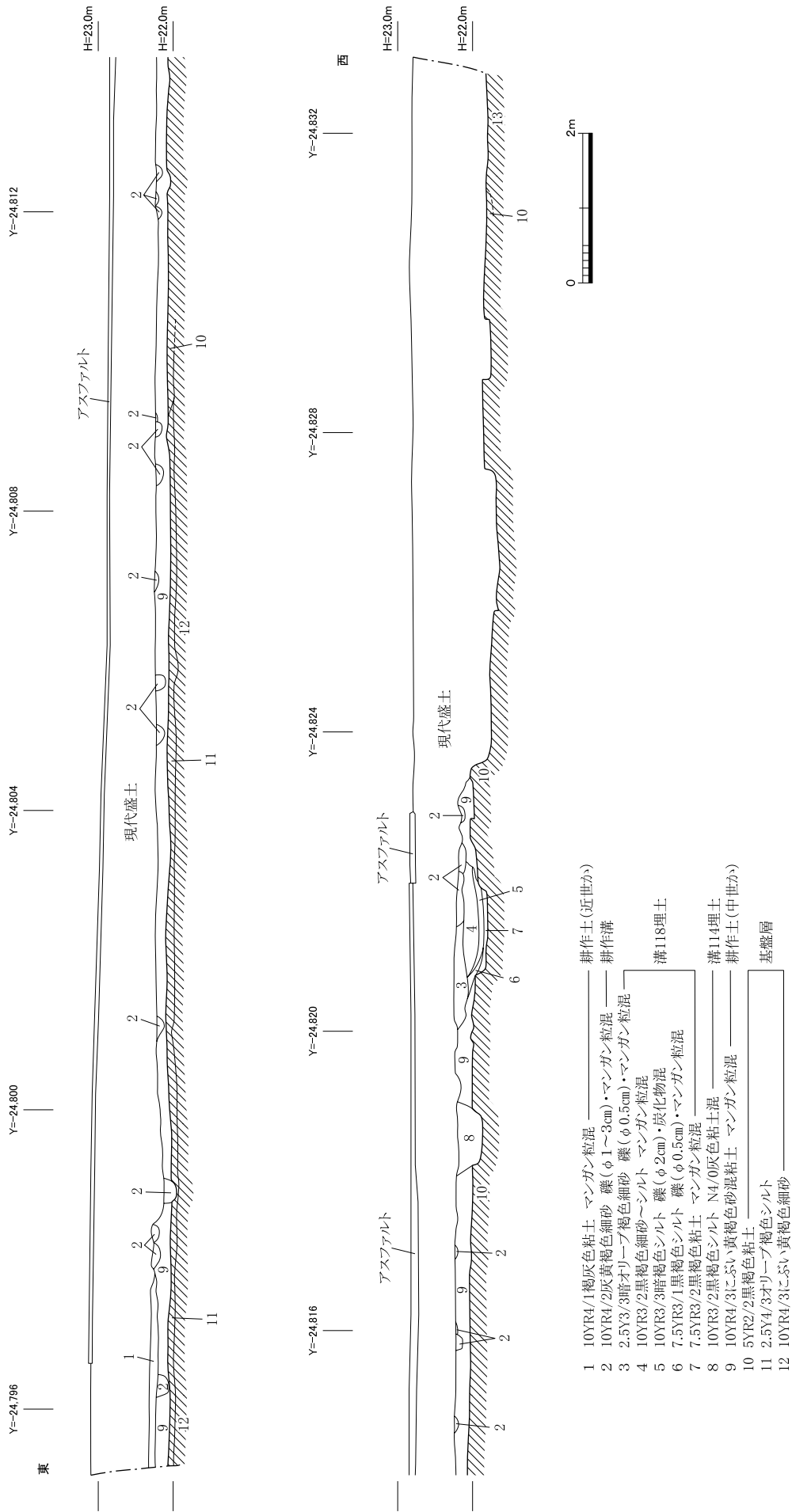


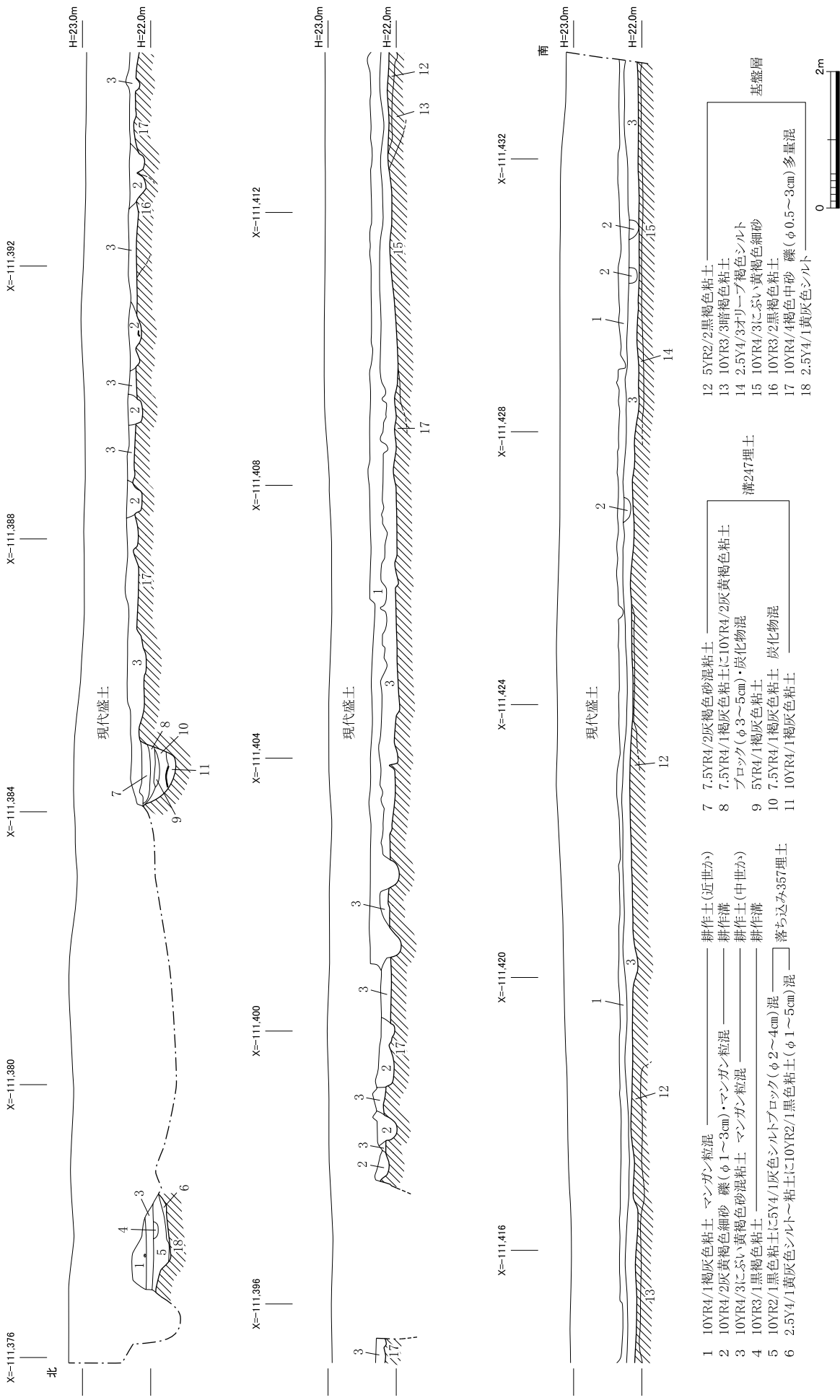


調査区平面図2 (1 : 200)

図版 4  
遺構

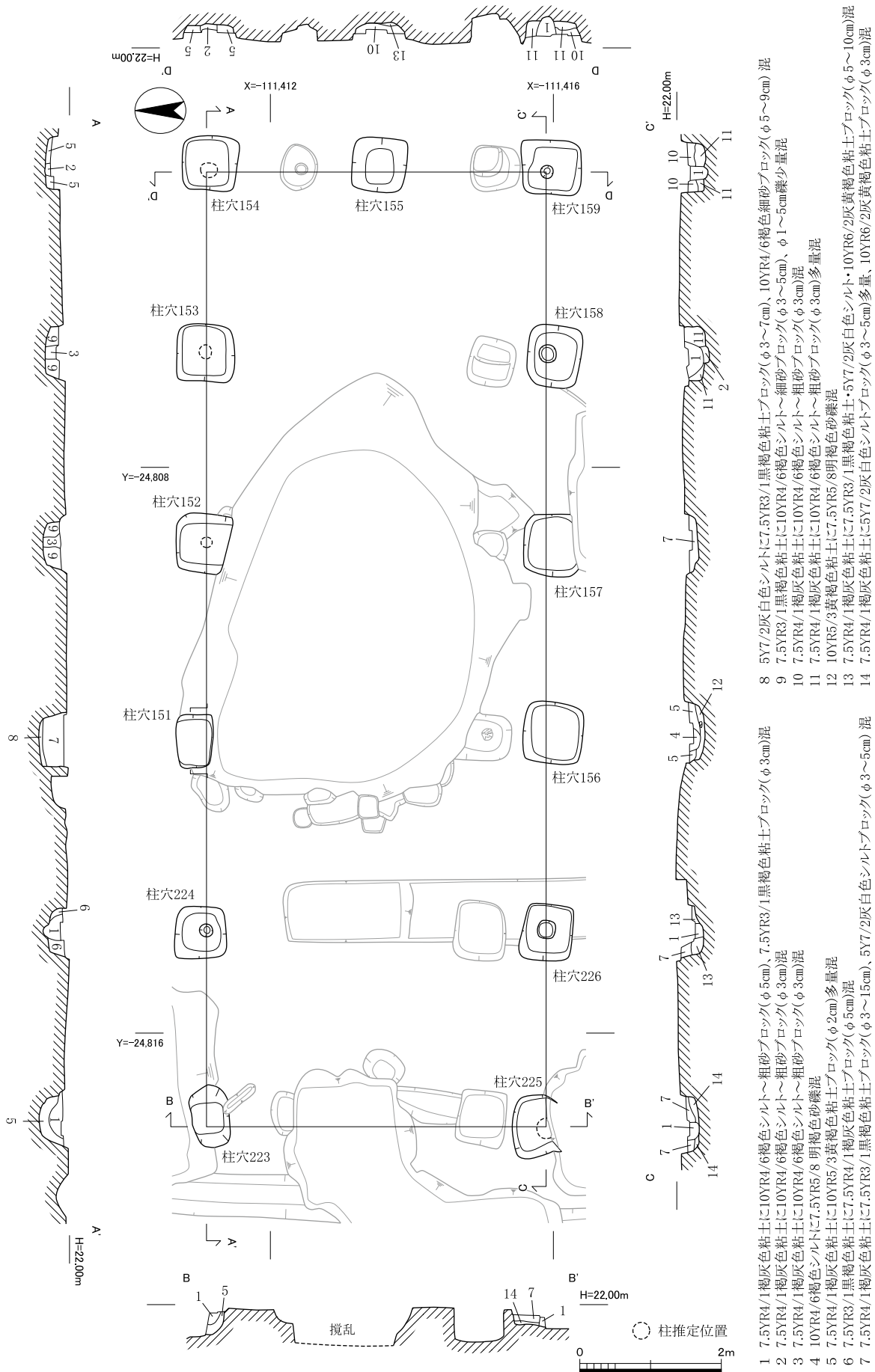
調査区南壁断面図 (1 : 80)





調査区東壁断面図 (1 : 80)

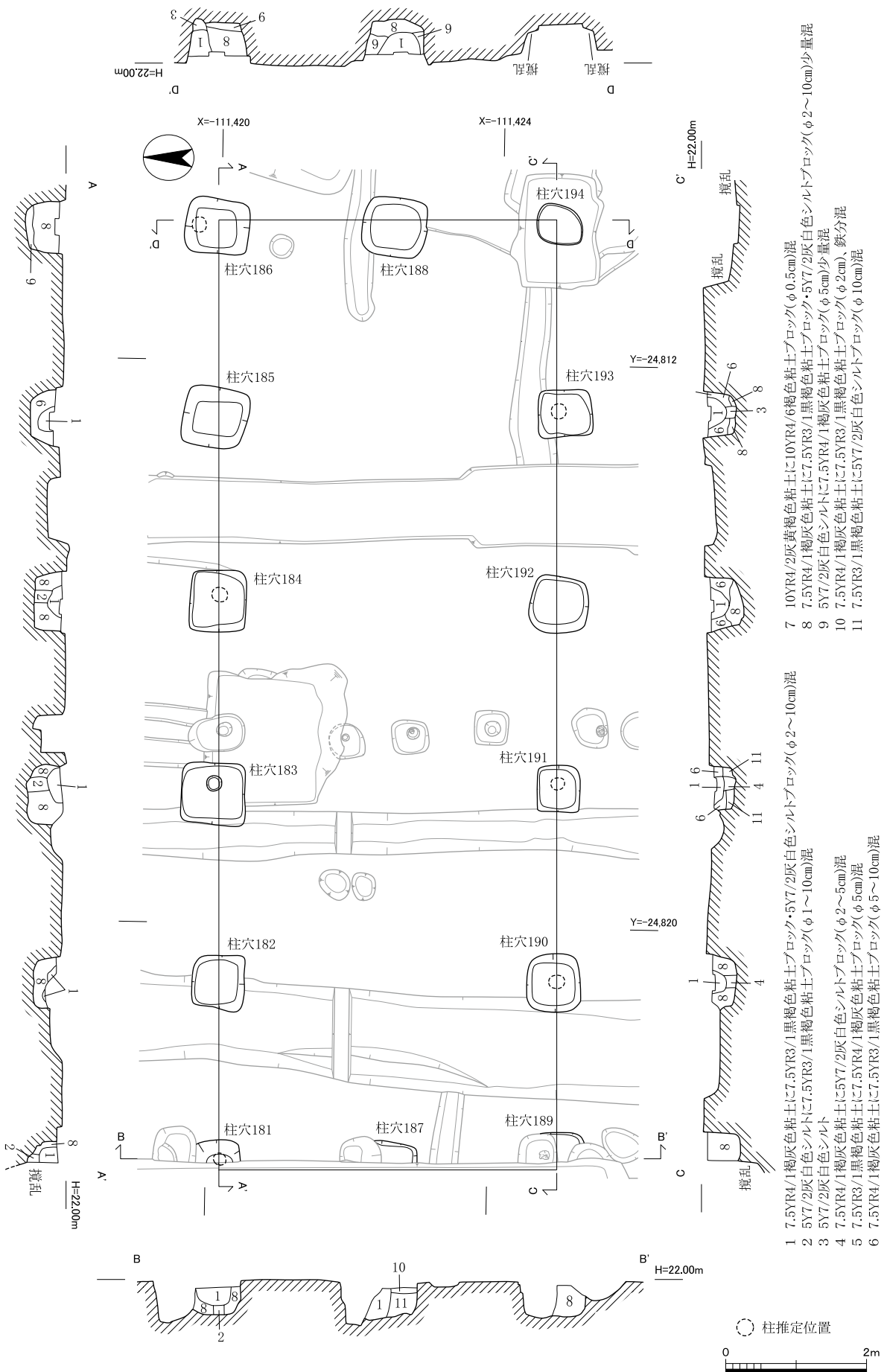
図版6 遺構



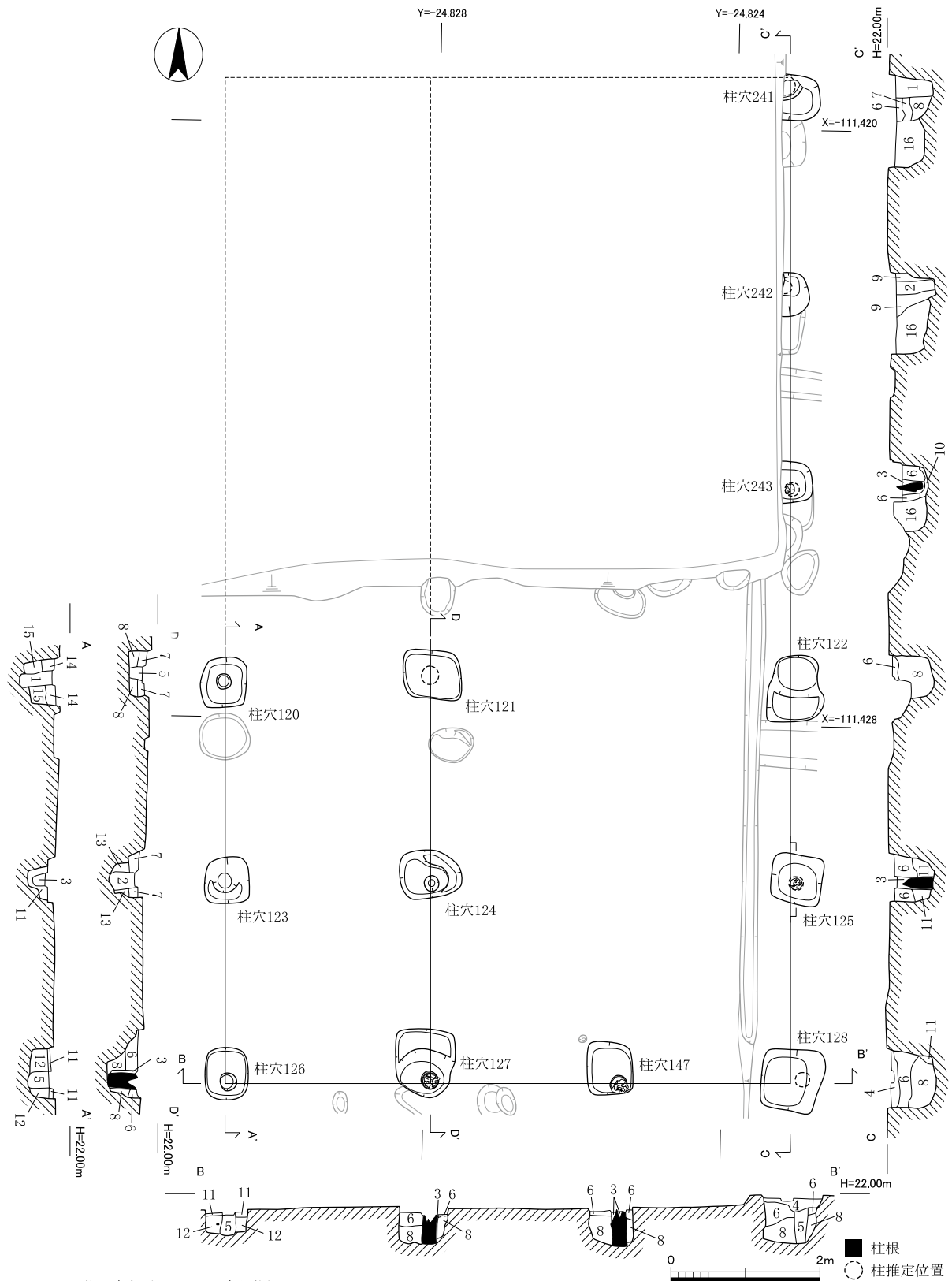
建物1実測図(1:80)



図版 8 遺構

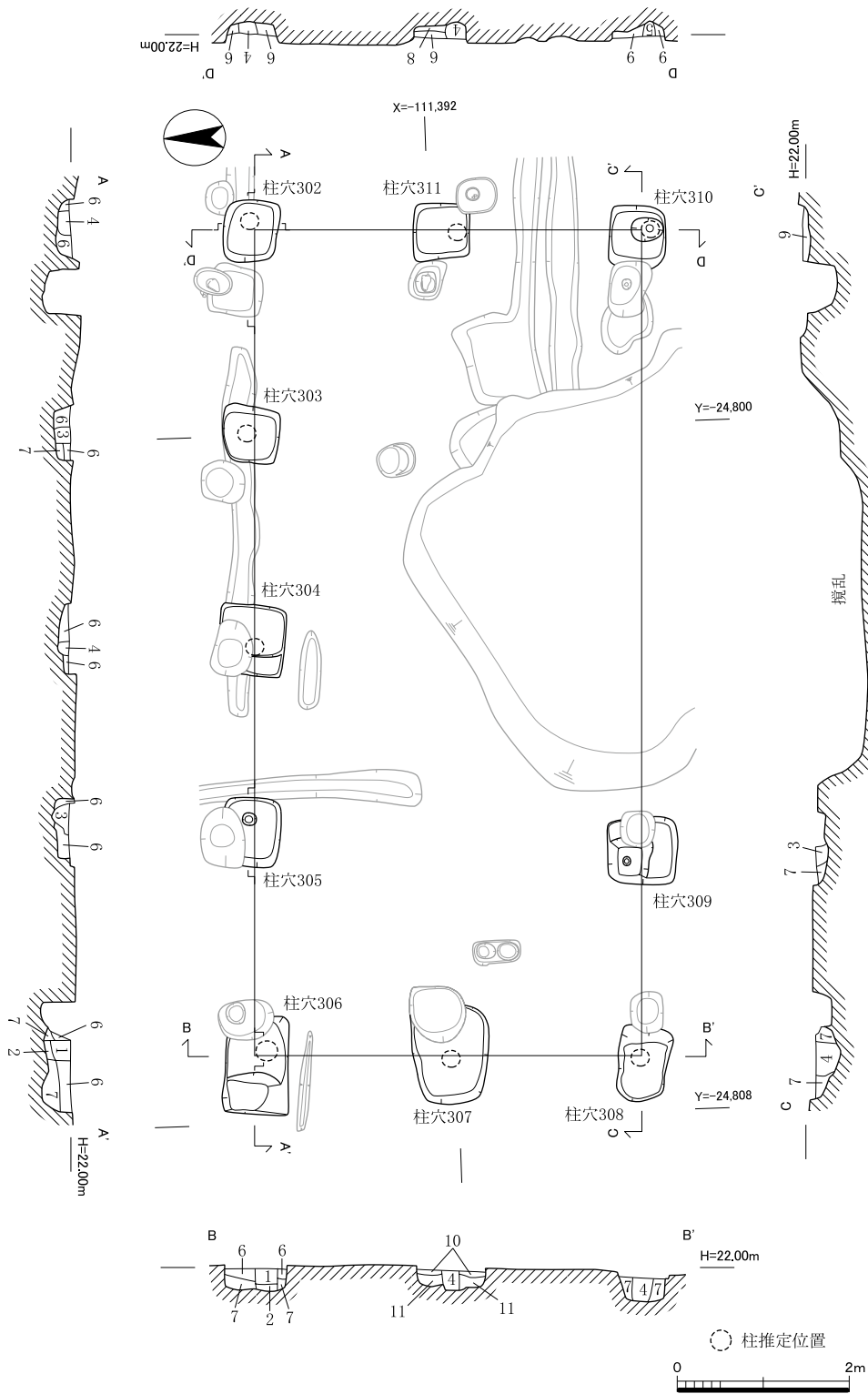


建物3実測図(1:80)



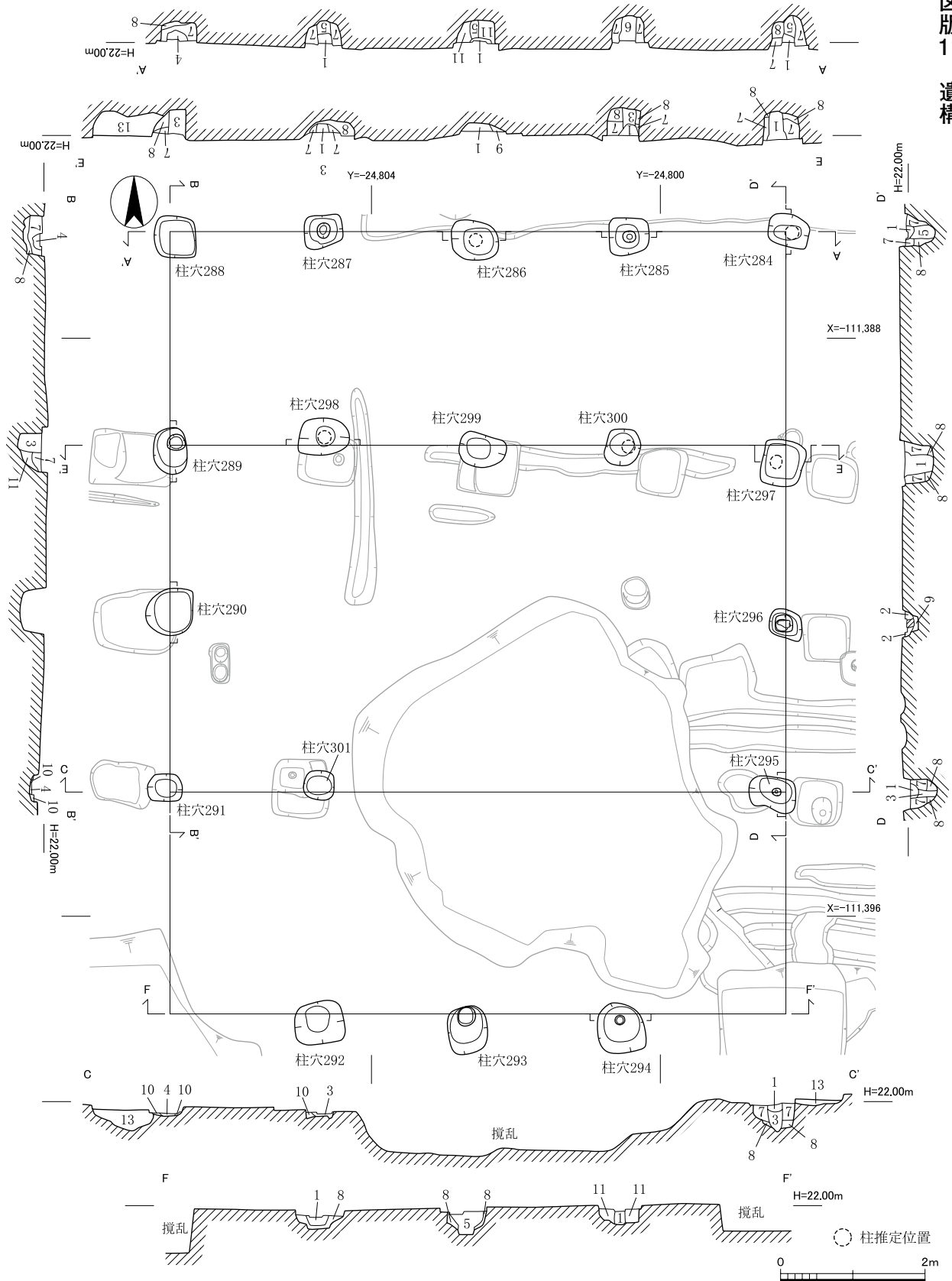
- |  |  |
|--|--|
| 1 10YR4/1 褐灰色細砂〜シルトに炭化物混                                       | 10 2.5Y4/1 黄灰色粘土   |
| 2 2.5Y4/1 黄灰色細砂に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック(φ4cm)混                      | 11 7.5YR3/1 黒褐色粘土に5Y7/2 灰白色シルトブロック(φ5〜15cm)少量混                             |
| 3 7.5YR4/1 褐灰色粘土   | 12 7.5YR3/1 黒褐色粘土に5Y7/2 灰白色シルトブロック・10YR4/6 褐色細砂ブロック(φ1〜2cm)少量混             |
| 4 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック(φ2〜5cm)少量混                 | 13 7.5YR3/1 黒褐色粘土に5Y7/2 灰白色シルトブロック(φ1〜2cm)、10YR4/2 灰黄褐色中〜粗砂ブロック(φ2〜3cm)少量混 |
| 5 10YR3/3 暗褐色シルト   | 14 10YR4/6 褐色細砂にマンガン〜炭化物混  |
| 6 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック・5Y7/2 灰白色シルトブロック(φ1〜10cm)混 | 15 10YR4/6 褐色細砂に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック(φ3〜12cm)少量混                             |
| 7 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック(φ2〜5cm)少量混                 | 16 建物3柱穴埋土   |
| 8 5Y7/2 灰白色シルトに7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック(φ1〜8cm)少量混                   |  |
| 9 7.5YR4/1 褐灰色粘土に5Y7/2 灰白色シルトブロック(φ2〜5cm)混                     |  |

建物4実測図(1:80)



建物6実測図(1:80)

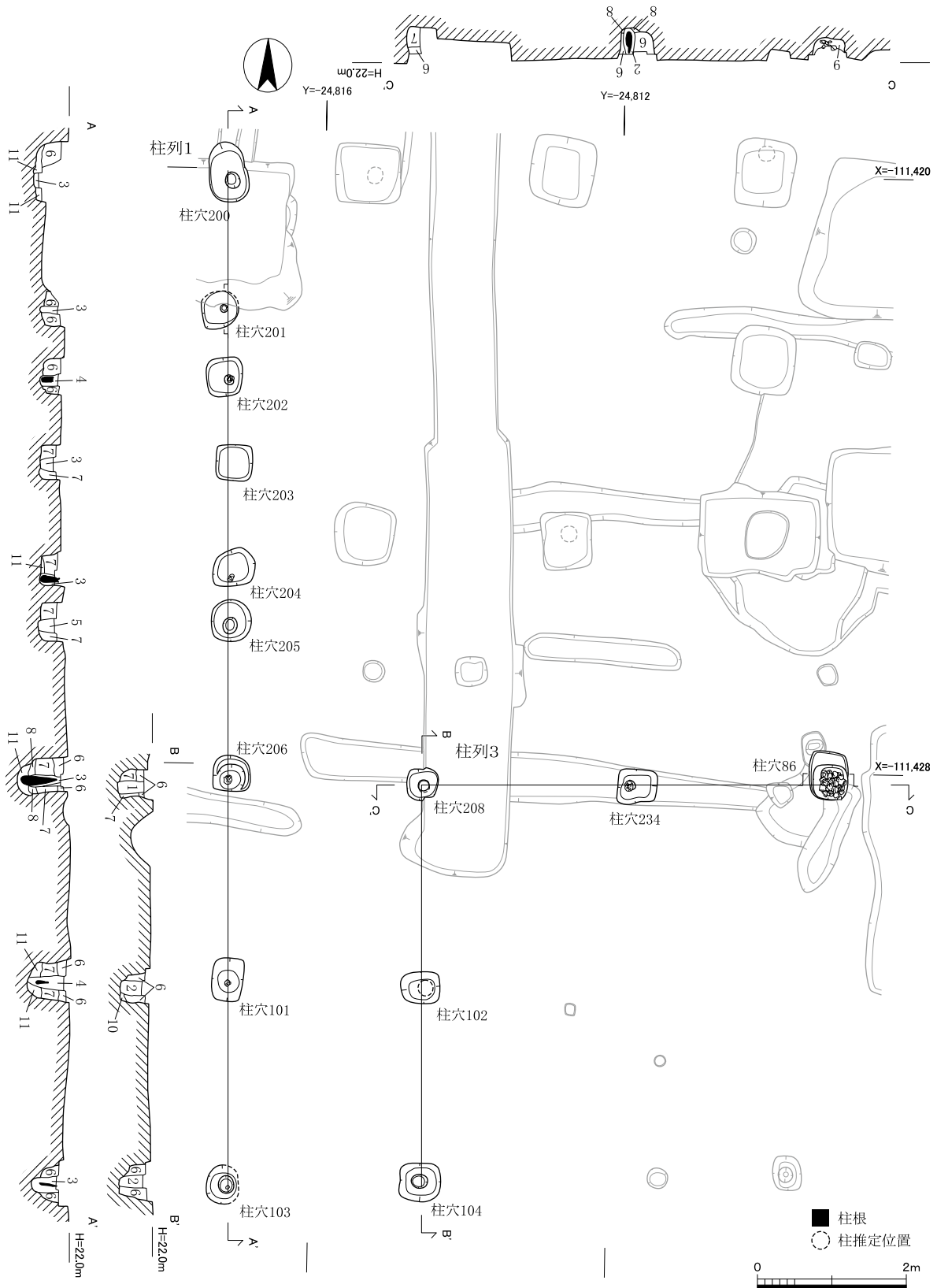




- 1 10YR3/1黒褐色粘土に2.5Y5/2暗黄灰色シルトブロック(φ3~10cm)多量混
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘土
- 3 10YR1.7/1黒色粘土に10YR3/3暗褐色粘土ブロック(φ10cm)混
- 4 10YR3/1黒褐色粘土に5Y5/2灰オリーブ色シルトブロック(φ1cm)混
- 5 10YR1.7/1黒色粘土に2.5Y5/2暗黄灰色シルトブロック(φ1~7cm)混
- 6 10YR3/1黒褐色粘土に10YR1.7/1黒色粘土ブロック(φ1cm)混
- 7 10YR1.7/1黒色粘土に2.5Y5/2暗黄灰色シルトブロック(φ1~12cm)混

- 8 10YR3/1黒褐色粘土に2.5Y5/2暗黄灰色シルトブロック(φ1~10cm)多量混
- 9 10YR1.7/1黒色粘土
- 10 10YR3/1黒褐色粘土に5Y5/1灰色シルトブロック(φ5~10cm)混
- 11 10YR3/1黒褐色粘土に10YR1.7/1黒色粘土ブロック(φ1cm)少量混
- 12 10YR1.7/1黒色粘土に2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトブロック(φ3~5cm)混
- 13 建物6柱穴埋土

建物7実測図(1:80)



1 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック (φ 1cm)・

5Y7/2 灰白色シルトブロック (φ 5cm) 少量混

2 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック (φ 1~5cm) 多量混

3 10YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR4/1 褐灰色粘土ブロック (φ 3cm) 混

4 2.5Y5/4 黄灰色粘土

5 7.5YR3/2 黒褐色粘土

6 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック (φ 3~5cm) 混

7 7.5YR4/1 褐灰色粘土に7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック (φ 5cm)・

5Y7/2 灰白色シルトブロック (φ 3~5cm) 少量混

8 7.5YR4/1 褐灰色粘土に5Y7/2 灰白色シルト混

9 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土

10 10YR4/2 灰黄褐色粘土

11 5Y7/2 灰白色シルトに7.5YR3/1 黒褐色粘土ブロック (φ 3cm) 少量混

柱列 1・3 実測図 (1 : 80)



1 調査地遠景〔1区〕(北から)



2 調査地遠景〔2区〕(南から)



1 1区全景（東から）

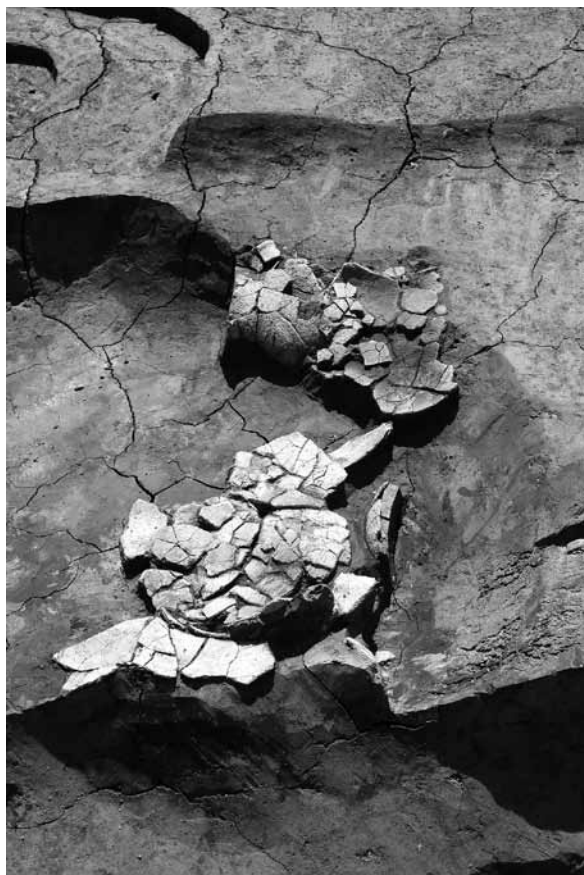


2 2区全景（北東から）





1 土坑331 (北東から)



2 土坑331 遺物出土状況 (北から)



3 建物1・2 (東から)



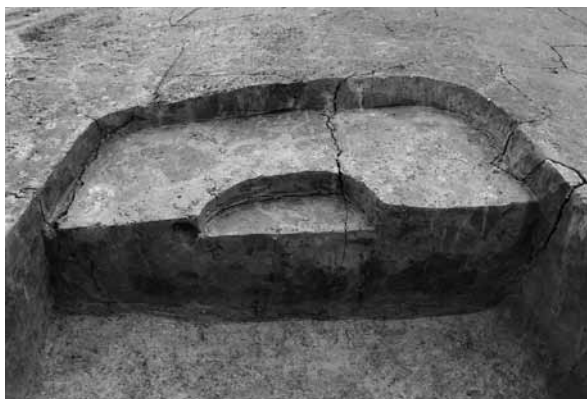
1 建物2北端（北東から）



2 建物3（東から）



3 建物4（南から）



1 建物1柱穴224半裁断面（北から）



2 建物2柱穴163半裁断面（北から）



3 建物4柱穴125半裁断面（東から）



4 建物4柱穴147柱根検出状況（北東から）



5 調査区南東部（北東から）





1 建物6・7（北から）



2 柱列1（南から）



3 柱列2（北東から）





1 溝247遺物出土状況（西から）



2 溝247完掘状況（西から）



3 溝356・落ち込み357（東から）



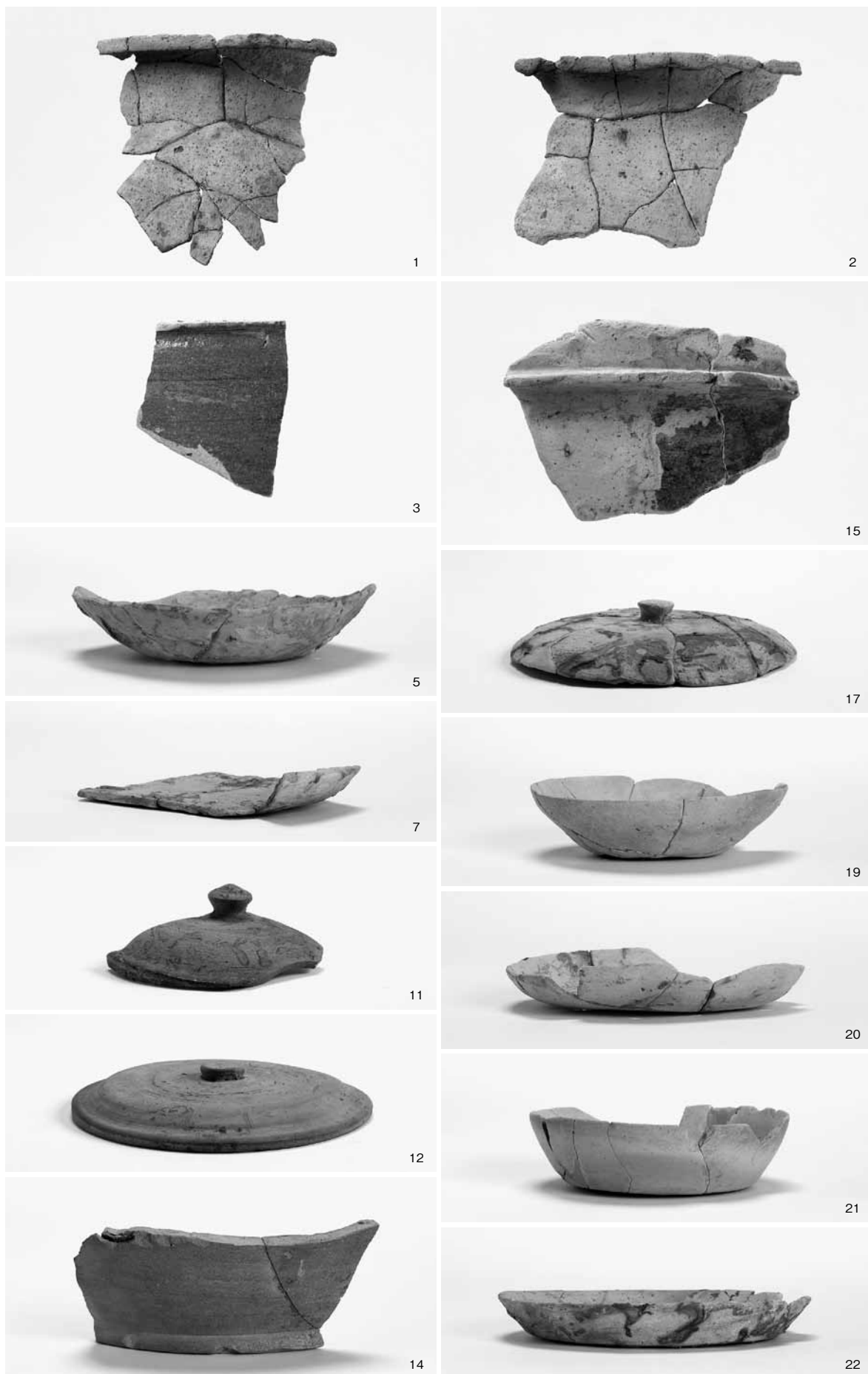
4 溝356遺物出土状況（北西から）



5 溝356断面（西から）



6 落ち込み357断面（西から）



土坑331、建物3、溝247・356出土土器

# 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうさんぼうろくちょうあと							
書名	平安京右京六条三坊六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2023-1							
編著者名	松吉祐希							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2023年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 さいいんにしみぞきちよう 西院西溝崎町  19番地1他	26100	1	34度 59分 44秒	135度 43分 41秒	2022年12月 8日～2023 年5月15日	1,859m <sup>2</sup>	会社施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	弥生時代	土坑	弥生土器		弥生時代の土坑から弥生土器が出土した。 平安時代前期の建物群を検出した。		
		平安時代前期	建物、柱列、溝、 落ち込み	土師器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、黒色 土器、円面硯、瓦、柱 根				
		中世以降	溝	土師器、施釉陶器、瓦 器、磁器、染付				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2023-1

## 平安京右京六条三坊六町跡

発行日 2023年12月28日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番  
〒602-8358 TEL 075-467-5151